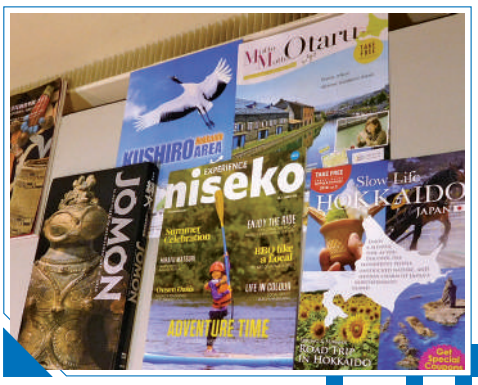


平成30年度文部科学省委託事業

「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」

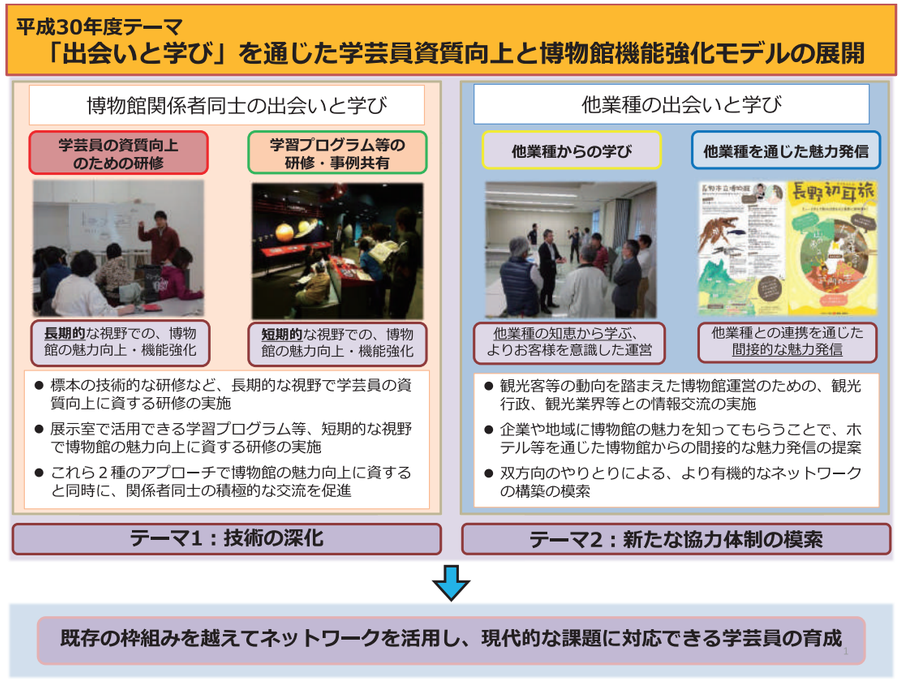
『「出会いと学び」を通じた学芸員資質向上と博物館機能強化モデルの展開』事業報告書

実施団体：国立科学博物館　北海道博物館協会　北海道博物館

事業のねらい

本事業は、平成 30 年度文部科学省委託事業「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承･発信事業」の委託を受け、北海道博物館協会、北海道博物館および国立科学博物館が連携して、地域博物館及び博物館職員の活動の活性化に資するべく、実施したものである。

具体的には、「「出会いと学び」を通じた学芸員資質向上と博物館機能強化モデルの展開」というテーマで、研修やシンポジウム、展示やプログラムの協働を通じた博物館関係者同士あるいは他業種との「出会いと学び」によって、北海道内の博物館関係者に刺激をもたらし、ひいては道内の博物館の機能強化に寄与することを目指すものである。



事業実施の背景

国立科学博物館での過去の事業の中で、地域の博物館関係者は、予算・人員的な面でなかなか研修に参加する機会が少ないという声が多く挙げられていた。また、観光や多言語への対応という現代的な課題の解決のためには、博物館単独ではなく、観光行政や民間企業などの複数の機関が連携・協力することの有効性についても改めて認識されたところである。

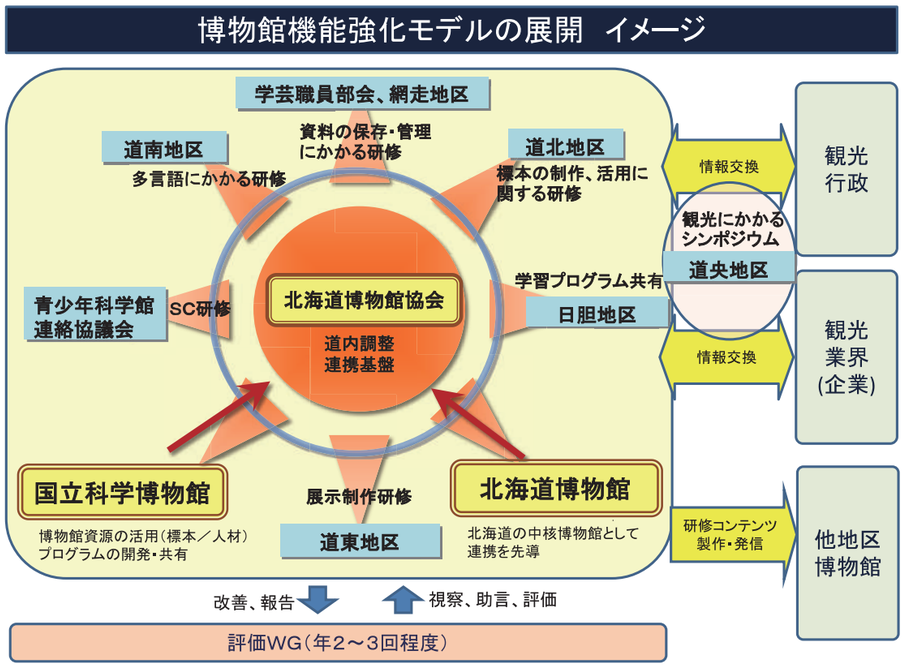
2020 年に向けて、従来の博物館の業務に加え、博物館に観光振興や国際交流の拠点としての期待がされているという状況の中で、博物館の継続的な魅力向上のためには、学芸員の技術向上や知識の蓄積により、学芸活動をより充実させていくことが不可欠であるため、今回の事業を推進した。

事業概要と実施体制

北海道では、北海道博物館協会内の各地区、部会、連絡協議会などでの、事例共有を中心とした研修会がこれまでも開かれているというベースがある。ここに国立科学博物館の職員や、国立科学博物館のネットワークを活用した講師等を派遣することで、これまで直接話を聞いたり、実習を行ったりする機会が必ずしも多くない内容をとりあげて研修やシンポジウムを実践した。

また、国立科学博物館で制作した巡回展やイベントを道内の博物館と協働して実施することで、お互いの手法や考え方を共有し、互いに今後の活動のヒントとなるような連携事業を実施した。

なお、研修の実施にあたっては、他地区や部会等での実施状況を共有できるよう、本報告書の制作や一部の研修の映像化を行うことで、次年度以降の各地区での研修のニーズの喚起や実施に資することをねらった。実施体制のイメージは下のとおり。



※事業全体の評価を行うために、外部の有識者を含む評価ワーキンググループを設置し、事業の視察等を通じて全体の評価を行うことにした。

評価ワーキング委員

（五十音順）

緒方　泉　九州産業大学　地域共創学部教授
洪　恒夫　東京大学総合研究博物館　特任教授
髙田　浩二　福山大学海洋生物科学科　教授
高安　礼士　福岡市科学館　プロジェクトアドバイザー（主査）
池本　誠也　国立科学博物館　事業推進部長
小川　義和　国立科学博物館　連携推進・学習センター長
細矢　剛　国立科学博物館　標本資料センター副センター長

研修の検討にあたっての事前調査

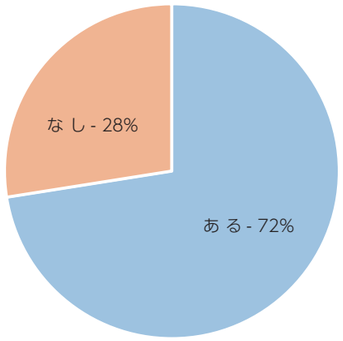
北海道内での研修事業を検討するにあたり、道内の博物館関係者の研修にかかる意識を調査するため、道内博物館関係者の研修に関する調査をおこなった。北海道博物館協会学芸職員部会のメーリングリストを通じて、グーグルフォームを活用したアンケートへの回答を依頼し、その結果を実際に実施する研修の内容を検討する際の参考とすることを意図した。

調査概要

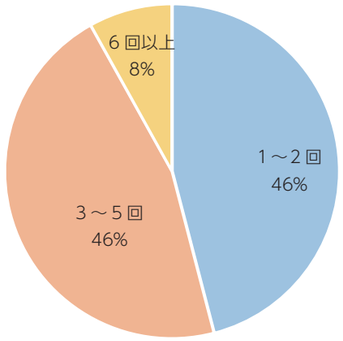
調査時期：平成30年6月14日～6月30日　●有効回答数：51件

●研修受講の実績について

Q. 過去３年間に博物館関係者向けの研修を受けたことがありますか？



Q.3 年間で受けた研修の回数を教えてください。

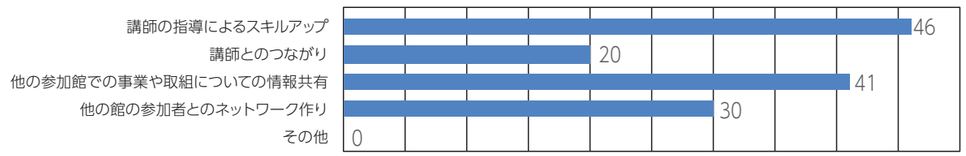


●参加した研修場所

Q. どこで開催された研修に参加されましたか？

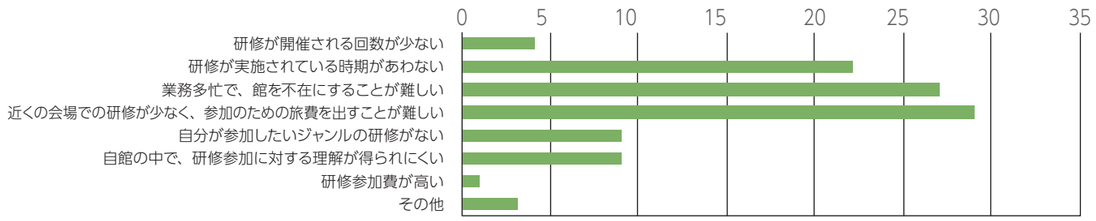
●研修に期待すること

Q. 研修を受けに行くときはどういったものを期待していきますか？（複数可）



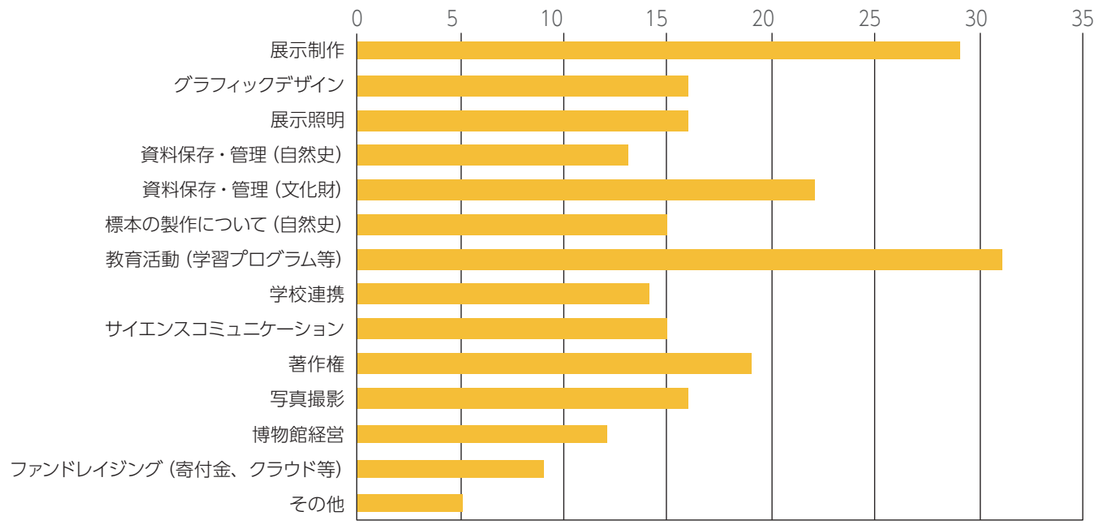
●研修の理由

Q. 参加が難しい理由を教えてください。（複数回答）



●受講してみたい研修

Q. 受講してみたいと感じる研修を教えて下さい。（複数回答）



自由記述（抜粋）

近年学芸員の世代交代が進み、学芸員としての基本的スキルを学ぶ場がなかったり、横のつながりがない中で不安を抱えながら仕事をしている人が多いように感じます。このため、午後いっぱいで一つの講座を行うなど、十分に一つの内容を掘り下げるとともに、各館の事例紹介を組み込むなど、参加者間のコミュニケーションの場となる研修になることを期待します。

理論等は論文等を読めば知識を深められるが、技術については実際に見て教えてもらうことで深まる。実技での研修が豊富になることを望む。

博物館は他館との人の入れ替わりがないため、各業務の手法が独自のものになってしまうことが多い。研修などを通じてスタンダードな手法、共通言語を持てるようにしたい。

研修会はそれなりに充実したものを実施していると思うが、館側で研修に積極的に参加させる雰囲気がない。旅費を出して参加させたいという雰囲気を作ってほしい。

状況をまとめると

●3年で一度も研修を受けていない方が 28%。

※「日本の博物館総合調査報告書（日本博物館協会　2017 年３月）」による全国の博物館を対象とした調査からは、「学芸員に研修を受けさせていない」という館が２割強あるというデータが導かれる。それと同じような傾向がでている。

●地区内の研修は比較的参加しやすい。

●旅費の支出と，館を不在にすることがバリア要因として大きい。

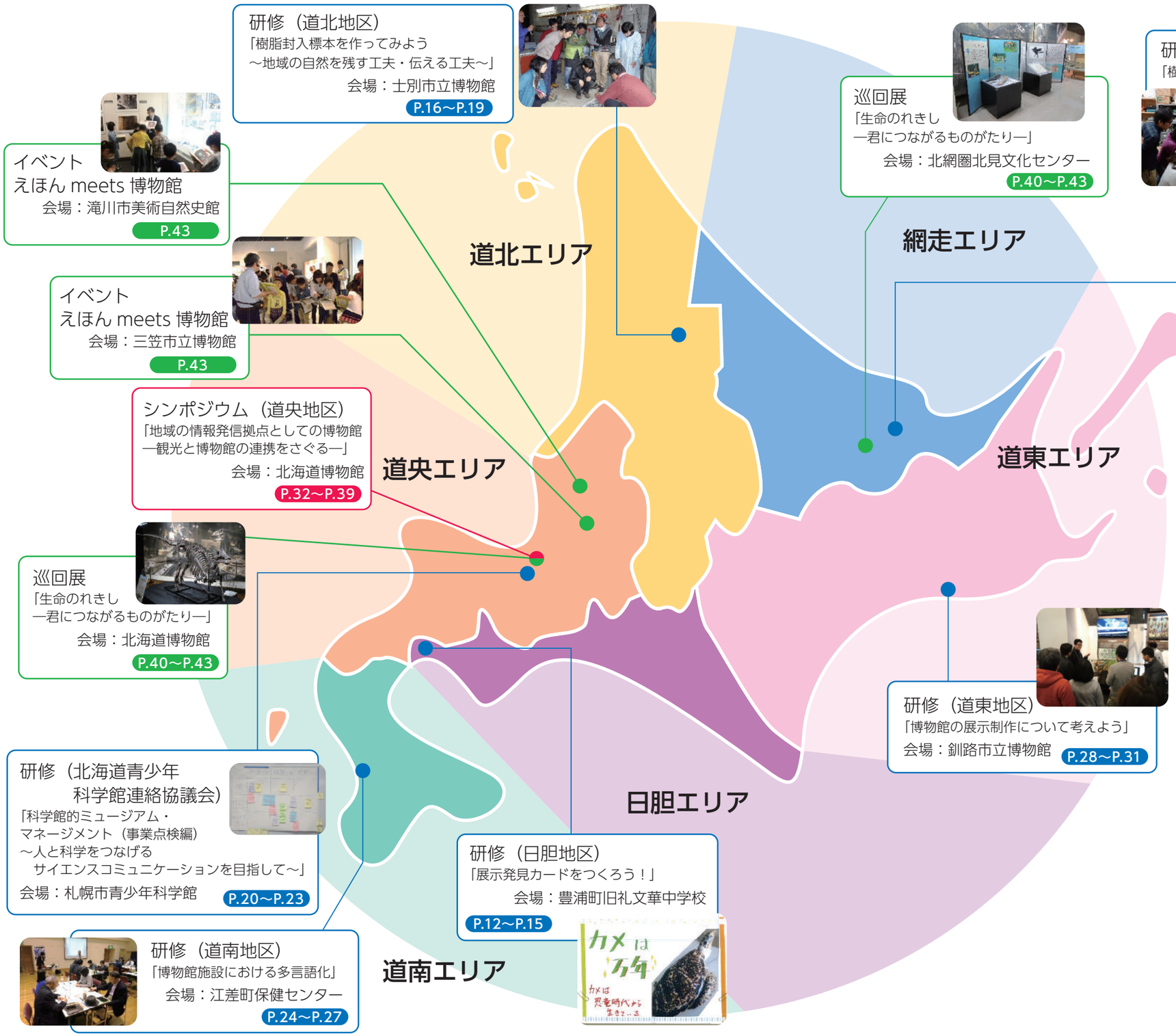
●受講希望分野としては「展示制作」「教育活動（学習プログラム）」の要望が強い。

●スキルアップを期待して参加する。情報共有やネットワーク作りへの期待も強い。

また、自由記述からは、「一つのテーマの深掘り」「実技」「コミュニケーションの場」「スタンダードな手法の把握」といったところへの要望も強い。

研修の実施にあたっては、上記のことを留意しつつ、各地区の研修実施担当者と調整を行った。

事業実施状況



実施スケジュール（一覧）

博物館関係者向け研修事業	
9月28日・29日	資料の取扱と修復について
10月16日	展示発見カードをつくろう！
10月27日	樹脂封入標本を作ってみよう ～地域の自然を残す工夫、伝える工夫～
10月28日	樹脂を使った標本作成ワークショップ
11月15日・16日	科学館的ミュージアム・マネジメント（事業点検編） ～人と科学をつなげるサイエンスコミュニケーションを目指して～
12月4日	博物館施設における多言語化
2月20日・21日	博物館の展示制作について考えよう
シンポジウム	
1月18日	シンポジウム 地域の情報発信拠点としての博物館 ―観光と博物館の連携をさぐる―
巡回展示・イベント	
12月8日～1月20日	生命のれきし －君につながるものがたり－
1月29日～3月3日	生命のれきし －君につながるものがたり－
9月23日	えほん meets 博物館
9月24日	えほん meets 博物館

資料の取扱と修復について

平成３０年度 北海道博物館協会 学芸職員部会研修会

概要、テーマ、ねらい

本州に比べ、冷涼で湿気の少ない北海道内の博物館（特に規模の小さい市町村立博物館）では、空調設備が不十分で温湿度の調整が行えないことが多い。また、築年数が経過した博物館では、断熱材が経年劣化し、外壁面に結露が生じ、結露箇所を中心にカビが発生したり、予算削減によって暖房費が十分に賄えず、冬期に収蔵庫や展示室が一桁台の気温になることもある。

こういった環境下では、資料を適切に保存することが困難であり、このような現状をふまえ、下記の内容で研修を計画した。

1日目	座学①　「剥製の取り扱い～主に鳥類標本を例として～」 座学②　「博物館資料の生物被害と文化財 IPM（総合的有害生物管理）について」
2日目（選択式）	実習①　「剥製の修復と保存」 実習②　「文化財害虫等対策実習」

座学①・実習①では、剥製の取り扱いや保存環境について学ぶ。また、持ち込まれた死骸から剥製にするために注意する点や、処理不十分な仮剥製の追加処理方法、剥製のポーズを変更する方法などを実習する。

座学②・実習②では、文化財害虫による被害の実状や害虫・菌類の防除、資料の保管環境作りについて学ぶ。また、害虫の同定技術や害虫トラップによるモニタリング手法などについて実習する。

会場と参加人数

会　　場　美幌町町民会館、美幌博物館
参加人数　9月28日：60名
　　9月29日：実習① 22名　実習② 29名

スケジュール

9月28日	
13:15 ～ 13:20	はじめに　研修会の趣旨と流れ
13:20 ～ 14:35	座学① 「剥製の取り扱い ～主に鳥類標本を例として～」 岩見恭子（山階鳥類研究所）
14:50 ～ 16:05	座学② 「博物館資料の生物被害と文化財 IPM（総合的有害生物管理）について」 佐藤嘉則（東京文化財研究所）

9月29日	
9:15	美幌博物館集合
9:30 ～ 12:00 実技研修 （選択式）	実習① 「剥製の修復と保存」 岩見恭子（山階鳥類研究所）
	実習② 「文化財害虫等対策実習」 佐藤嘉則（東京文化財研究所）
12:00	解散

研修の実施にあたって　－ 運営者からのコメント －

●開催にあたって工夫した点

参加対象が自然科学を専門とする学芸員のみでないことから、基礎から応用まで学べるように工夫した。また、初日に座学、翌日に実習を行うことで学習効果を高めるよう努めた。

●開催にあたって苦労した点

学芸員向けの研修でありながら、自然科学や考古学など、専門性によっては熟度のバラツキが考えられた。そのため、基礎から応用まで幅広い内容での座学と実習となった。すべての参加者に満足していただけるような内容にすることが非常に苦労した。

●実施してみての感想や意見

実習①では実際の剥製を使った実習を行うことで、どのように標本を取り扱えば良いのか学習できた点は非常に良かったと感じた。 実習②では、文化財害虫のサンプリング手法から実体顕微鏡での観察による種の同定作業を一連の流れの中で実習を受けることができたのは実践的であると好評だった。 いずれの実習においても、参加者から自館に戻ってすぐに取り組みたいとの意見が多くあがったのは、開催者としても非常に喜ばしい。

●実施に必要な物品、環境等

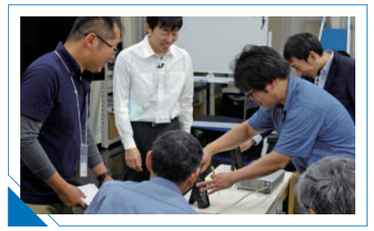
【座学①②】 プロジェクター、配布資料

【実習①】 プロジェクター、配布資料、修繕の必要な仮剥製、面相筆、シャーレ、ゴム手袋、台所洗剤（ジョイ）、キムタオル、キムワイプ、ドライヤー、ラベル用の紙、麻糸

【実習②】 プロジェクター、配布資料、文化財害虫辞典、文化財害虫標本、実体顕微鏡、害虫トラップ作成キット、ATP 測定器、ATP 試薬（プロジェクター以外の物品は、東京文化財研究所よりご手配いただき、使用した）

●担当者連絡先

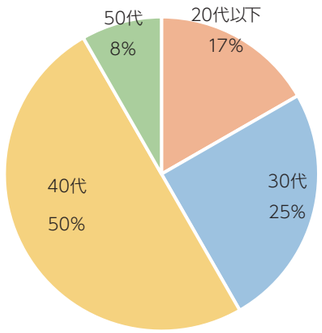
座学①　実習①
美幌博物館　町田善康（TEL：0152-72-2160）
座学②　実習②
美幌博物館　八重柏誠（TEL：0152-72-2160）



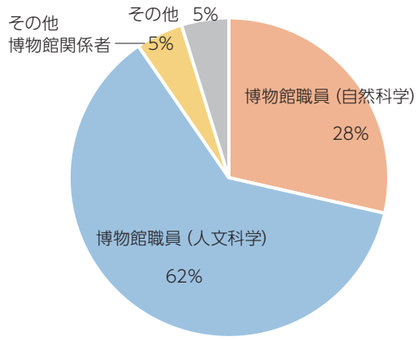
資料の取扱と修復について

―研修参加者の声―（参加者アンケートより抜粋）

Q. 年代を教えてください。



Q. ご職業を教えてください。



Q. 1日目の講義を受けてどのような気づきがありましたか？

文化財 IPM について、予防が重要だという点が大変参考になった。またその方法についても具体的に対処方法が説明されたのが勉強になった。また、理想的な状況、現実的にどこまでできるかを考えることも必要だと感じた。

文化財 IPM について、文化財害虫や菌類について除去することよりも発生しないために環境を整えるのが大事だとわかりました。

「剥製」の講義では標本受け入れから製作、乾燥と燻蒸、保存方法と収蔵までの流れを確認した。当館でできる工程ばかりではなくとも、本来すべきことを確認したおかげで、最低限の保存性を高める作業を心がけられるきっかけとなった。保存性を高めるための作業のより詳細な部分を「IPM」の講義で学ぶことができた。こちらも燻蒸など全館的な取り組みなどできないことも多かったが、手垢やほこりがカビの餌となることや湿度によってカビの繁殖条件が大きく変わることなどを学び、できる対策をとるだけで、大きく収蔵物の保存性をあげることができることを感じた。

剥製標本の保存は害虫に気をつければいいと思っていましたが、不十分な製作による傷みや収蔵の問題など想像以上に大変だということがわかりました。文化財の生物被害については、実際に被害を受けた資料をみてここまで酷くなることに驚きました。自館の資料の保存環境についても気をつけなければと感じさせられました。

岩見さんのお話では、剥製や骨格標本などの鳥類標本について作製から管理、研究、教育普及について聞くことができて勉強になりました。特に山階鳥類研究所でのデータベースを利用した管理方法についてなど、知らないことを知れてよかったです。佐藤さんのお話では、実際に虫害を受けた文書を見せていただき、かなり衝撃的でした。生物による被害は発見から進行までが早いことなど、気をつけるポイントを知ることができてよかったです。

Q.（2日目に岩見先生の実習に参加された方にお聞きします。）岩見先生の実習を通じてどのような気づきがありましたか？

非常に勉強になりました。クリーニング方法を実際に体験できたのは、とてもよかった。

実際に実習を行ってみると難しい点が多く、専門性・経験が必要だと感じた。実際に作業に必要な経験ができたこと自体は貴重な経験であったが、専門外の人間が無理に対応するのではなく、専門家に依頼することが必要だと感じた。

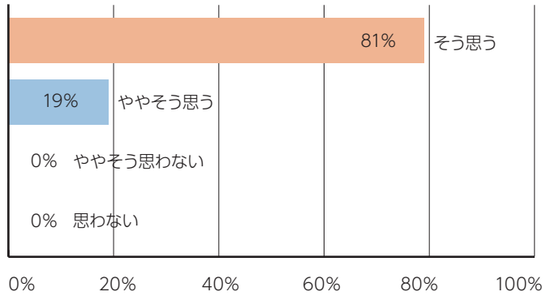
Q.（2日目に佐藤先生の実習に参加された方にお聞きします。）佐藤先生の実習を通じてどのような気づきがありましたか？

簡単にできるトラップ作成など、自館で試そうと思った（まだ試せていないが）。また、清掃の重要性を痛感した。

現状でできることも多く、IPM の敷居が低くなった。

実習を通じて基本である資料管理に総合防除の考え方が導入されたことで学芸員の幅広い知識と専門性の高さが要求されますが、学芸員の力の見せどころであるとの認識も深めることができました。

Q. 今回の研修で得た知識は自館の活動や事業に活かせそうでしたか？



Q. 上の質問で「そう思う」「ややそう思う」と答えた方にお聞きします。それはどんな活動や事業か教えてください。特に、さっそく実施したことがあれば教えてください。

トラップを自作して、設置し、まずどんな害虫がいるのかを把握したい。

館に戻り、さっそく収蔵庫の清掃を行いました。メタルラックの隙間や普段扱わない資料について清掃をしました。床は常にきれいにしていましたが、普段扱わない資料は、思った以上に汚れていました。

虫トラップの設置位置や、どんな虫が捕れたかで考えられる対策をするようになった。

研修で学んだトラップの作り方については、自然資料の担当者に伝え活用してもらえました。研修会全体を通して、研修の流れや進行方法、総括など参考になりました。今後の研修会の在り方のヒントになりました。

剥製について、館内の標本の点検を行いたいと思います。これまでは放置してしまっていた汚れを落としてみようと思います。IPM については日頃から実施していますが、館内での実施状況が的確であるかどうかを気にするようになりました。

Q. 今回の研修のご意見、ご感想について

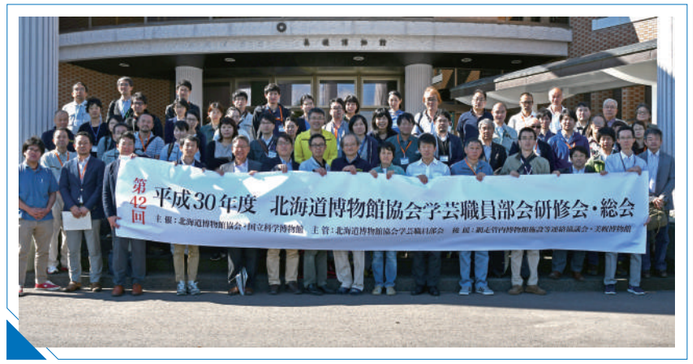
剥製の取扱いについて、保管の方法が具体的でわかりやすく、参考になった。剥製や標本が個人で製作出来ることが解かり、資料を増やす際に出来ることがあると知った。IPM について、実際の対策事例などを具体的に示し、参考になった。自館でも取り込むべき事や確認すべき点が見えた。基準も明確で、すぐにでも取り組める点が良かった。

1 日目の座学だけでなく、2 日目により詳細な内容を教わることができ、この研修行程はとてもよかったです。通常であれば人数的に実技の内容は難しいと思いますが、今回は実際に自分の手を動かして学ぶことができ、とても貴重な体験となりました。

害虫対策について、自館でも取り組みたいと感じることができた。今までの危機意識の低さに気が付きました。

情報交換会で他館の学芸員の方々と交流を深めることができました。また IPM の実習が非常に有意義で自館に帰ってすぐに取り組める。ワザ（トラップ・同定方法）を学べたことが大きかったです。

はく製や害虫・カビについて、知識とともに、実習で学ぶことができ、これからすぐに仕事にいかしていきたい、いかせるよう頑張ろうと思いました。特にはく製については、あまり学んだことがなく、とても楽しく学べました。ありがとうございました。



講　師　紹　介

山階鳥類研究所
自然誌研究室　研究員
岩見 恭子

東京文化財研究所
保存科学研究センター
生物科学研究室長
佐藤 嘉則

展示発見カードをつくろう！

日胆地区博物館等連絡協議会

概要、テーマ、ねらい

●趣旨

北海道日高・胆振地区の加盟館園職員・関係者が一堂に会し、参加者の資質向上と博物館活動の一層の活性化を図る。

●研修テーマ

「博物館の展示の魅力を伝えよう」

国立科学博物館及び北海道博物館協会と共催し、「写真」と「ことば」で博物館の展示の魅力を伝えるワークショップ型研修を実施する。

会場と参加人数

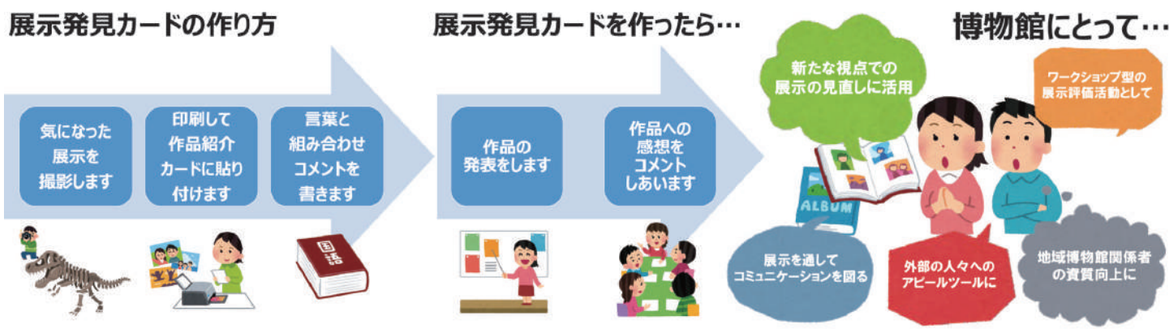
会　　場　豊浦町旧礼文華中学校（収蔵庫）

参加人数　加盟館園職員・関係者及び本研修会の趣旨に賛同する方　24人

スケジュール

10月16日	
13:30 ～ 13:40	開会式
13:40 ～ 17:30	研修 「博物館の展示の魅力を伝えよう」 （講演、実習、全体協議）
17:30	閉会

10月17日	
9:00	集合
9:15 ～ 12:00	エクスカーション （国指定名勝「ピリカノカ」 カムイチャシ　他）
12:00	解散



研修の実施にあたって　－ 運営者からのコメント －

●開催にあたって工夫した点

今回は国立科学博物館・北海道博物館協会との共催事業であることから、より有意義な研修となるよう、加盟館園以外からも参加者を募った。

●開催にあたって苦労した点

9月6日に発生した胆振東部地震の直後で被災館園もあり、研修会実施の可否を検討したが、実施することにした。会場は常時開館している施設ではないが、開催地の特段のご配慮により使用することができた。

●実施してみての感想や意見

日胆地区では年1回の研修事業を実施していますが、今回は国立科学博物館・北海道博物館協会と共催したことにより、より幅広い参加者の交流ができ、博物館のネットワークを広げることができたと思う。研修内容も博物館の資料だけでなく、様々な分野に応用が利くよいテーマだったと思う。また、研修に使用したカメラやプリンター等の機材を科博に準備していただいたことで、非常に助かった。

●実施に必要な物品、環境等

展示物の見学・撮影ができる会場、パソコン、プロジェクター、デジタルカメラ、プリンター、スクリーン

※今回の研修では，デジタルカメラは参加者に持参していただいた。

●担当者連絡先

日胆地区博物館等連絡協議会　事務局　児玉

様似町教育委員会

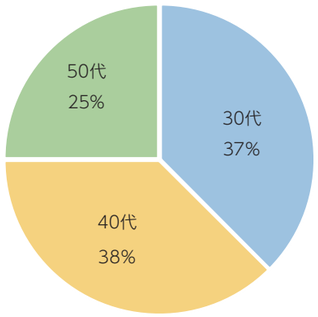
（TEL：0146-36-2521）

研修実施後、作成した作品を一冊のアルバムにまとめました。

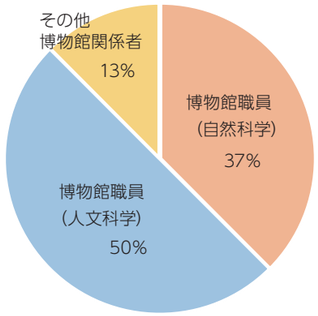
展示発見カードをつくろう！

―研修参加者の声―（参加者アンケートより抜粋）

Q. 年代を教えてください。



Q. ご職業を教えてください。



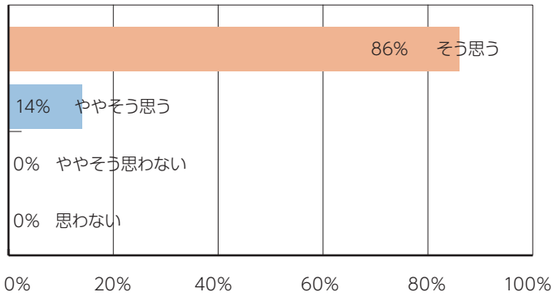
Q. ワークショップ「展示発見カードをつくろう！」に参加されてどのような「気づき」がありましたか？

日頃から文化財に関わりの深い博物館関係職員ならではの着眼点やコメントの書き方、写真の撮り方などが参考になりました。

同じ博物館学芸員であっても、物の見方、感じ方が千差万別であることを改めて気づかされた。このことは、来館者対応するものとして、解説する際に役に立つ。

- 資料からの目線で使用方法や来歴、所有者情報、展示方法と考えるようになっていたので、「発見」、「裏側」など言葉から資料を見る、探す、想像する面白さ（見かた）を思い出しました。
- 他の博物館を見に行って、お客さんの目を養わなければと思いました。

Q. 今回の研修で得た知識は自館の活動や事業に活かせそうでしたか？



Q. 情報交換会では他館の方との交流を通じてどのような「気づき」がありましたか？

同じ言葉を選んでも、多彩な視点があることへの「気づき」がありました。

他館においても共通の悩み（財源、人手不足）があることを知りました。

Q. 今回の研修のご意見・ご感想について

早速、中学校２年生の職場体験で活用させていただきました。初日は展示物紹介。２日目が、まち紹介、２時間歩き、写真を撮り、マップを作りました。途中途中で、キーワードを思い出す（確認する）ことが大切でした。あと、ちょっとしたアドバイス。実習生の行動を見ながら、カメラを向けた対象物の簡単な説明、例えば、リサイクル業者は住民にとって不可欠なんだよ～とか。認識していない対象物（例えば石碑等）の説明とか。博物館資料館事業だけでなく、地域づくりにも使える手法と感じています。

今回はプリンターなどを用意していただいたので、持参のカメラでの撮影データをすぐさまプリントし、アルバム製作ができたが、これをこのまま自館で実践はできないのでアレンジしながら検討したい。

「展示発見カード」は自館においてこども向けのイベントでも活用できそうだと思いました。

講　師　紹　介

結 creation
北村 美香

樹脂封入標本の製作と活用にかかる研修

樹脂封入標本を作ってみよう～地域の自然を残す工夫、伝える工夫～　【道北地区】
樹脂を使った標本作成ワークショップ　【網走地区】

概要、テーマ、ねらい

道北地区･網走地区の博物館関係者を主な対象として、樹脂封入標本の実践的な製作行程を体験するとともに、自然史標本の収集、保管、活用に関する座学や事例紹介、意見交換を行う。それらを通じて、地域の自然を残し、伝えることについて、改めて考える機会を設け、博物館関係者のスキルアップをねらう。本研修は、２ヶ所の会場で実施した。

1日目	①士別市立博物館（道北地区） 「樹脂封入標本を作ってみよう ～地域の自然を残す工夫、伝える工夫～」
2日目	②美幌博物館（網走地区） 「樹脂を使った標本作成ワークショップ」

会場と参加人数

【会　場（道北地区）】
会　　場　士別市立博物館
参加人数　道北地区および道内の博物館関係者16名
【会　場（網走地区）】
会　　場　美幌博物館
参加人数　近隣博物館学芸員、自然解説スタッフ、学芸員課程を学ぶ学生、博物館ボランティア等、参加者数17名

スケジュール

10月27日（道北地区）	
9:50 ～ 10:00	一層目樹脂の調整（参加者も交えて）
10:00 ～ 10:15	イントロダクション
10:15 ～ 11:00	一層目樹脂投入、サンプル選び
11:00 ～ 11:30	サンプル設置、２層目樹脂投入
11:30 ～ 12:00	骨格標本展の展示標本を題材にした標本作製解説
12:00 ～ 13:20	昼食　※ホーマックで役立つ道具紹介（希望者のみ）
13:20 ～ 14:00	３層目投入
14:00 ～ 15:15	研磨作業 （卓上丸ノコによる切断と耐水ペーパーの研磨）
15:15 ～ 16:40	スライドによる活用事例紹介・質問タイム
16:40 ～ 17:00	終了、記念写真撮影

10月28日（網走地区）	
11:00 ～ 12:00	樹脂１層目流し込み
12:00 ～ 13:30	樹脂２層目流し込み、昼食休憩
13:30 ～ 15:00	樹脂封入標本を使った実践例についてパワーポイントによる講義実施
15:00 ～ 17:00	樹脂３層目、および研磨方法講習
17:00	終了

研修の実施にあたって　－ 運営者からのコメント －

●開催にあたって工夫した点

道北地区
花や種子、昆虫、動物のフン、魚、水生昆虫等、サンプルの種類を豊富に用意し、種類ごとに異なる細かな作製のコツを紹介できるようにした。開催中の特別展「透明標本と骨格標本の世界」で展示している標本を題材にした作製や活用の解説も実施した。事前アンケートを実施して、参加者の知りたい内容をあらかじめ把握し、参考にしながら開催をした。

網走地区
今回はより多くの人に本講座の成果が還元されるように、なるべく技術を実践する可能性のあるような受講者を募集するように努めた。

●開催にあたって苦労した点

道北地区
封入用サンプルの準備、参加募集の周知。

網走地区
有機溶媒を使用するため野外で乾燥などをしたが、風が強く標本が倒れるなどした。

●実施してみての感想や意見

道北地区
当館の通常の事業では呼ぶことのできない講師による講習を開催することができた。研修中には講師と参加者の間で活発な意見交換が行われ、つながりを作ることができた。小規模館でも活用可能な技術を紹介することができた。定型化した作製法がない中、講師の試行錯誤の中、行っている方法、技術を紹介することができた。開催時期の関係で、気温が低いために樹脂が固まりにくく、また換気の良い場所は寒い。引火性に気をつけながらも、樹脂を事前に温めておいた方が良い。

網走地区
各参加者はたいへん熱心に受講していたほか、持参した標本も昆虫のほかに頭骨や花、地衣類など多様で互いの標本作成プロセスから学ぶことも多かった。

●実施に必要な物品、環境等

【消耗品】封入用サンプル、シリカゲル、各種濃度エタノール、封入樹脂、ベロ口、硬化剤、スチレンモノマー、タッパー２種、取り分け用容器、ジフ、耐水ペーパー、研磨用標本サンプル、キガタメール、キノコ標本用サンプル、段ボール、養生テープ、古新聞、キッチンペーパー、プラスティックスポイト、ゴミ袋、わりばし 、標本持ち帰り用ビニール袋
【器具等】配布資料、扇風機、プロジェクター、スクリーン、ブロワー、減圧容器、卓上丸のこ、ピンセット、マジックペン、カッターナイフ、白バット
【環境】座学用の部屋、換気の良い作業スペース

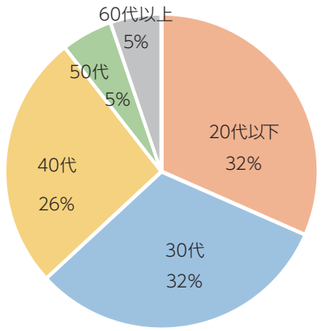
●担当者連絡先

【道北地区】士別市立博物館　本部
（TEL：0165-22-3320）
【網走地区】斜里町立知床博物館　村上
（TEL：0152-23-1256）

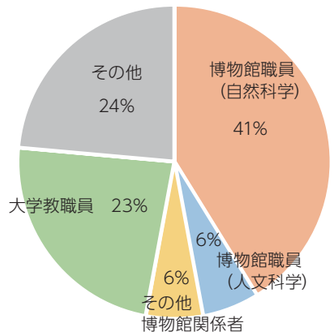
樹脂封入標本の製作と活用にかかる研修

―研修参加者の声―（参加者アンケートより抜粋）

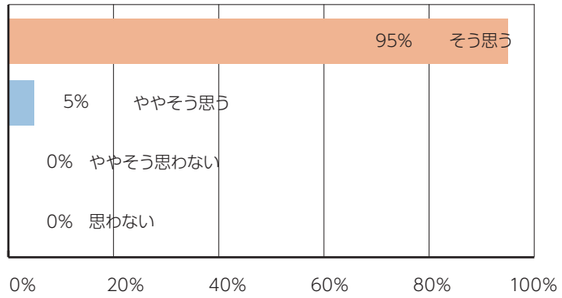
Q. 年代を教えてください。

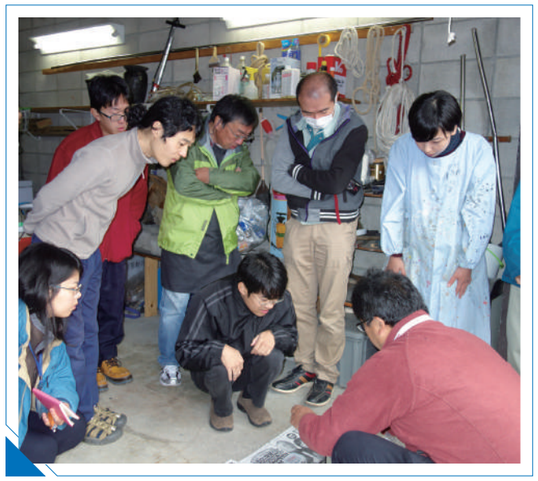


Q. ご職業を教えてください。



Q. 今回の研修を受けて、ご自身でも改めて標本をつくって見たい、活用していきたいと思いましたか？





Q. 今回の樹脂封入標本制作の実習で気付いたことや学んだこと、感じたことについて教えて下さい。

今まで何度か封入標本は作ったことがありましたが、うまくいかないことが多く苦労していました。今回の実習で、作成のポイントを多々教えていただき、失敗しない封入標本づくりができそうです。また、活用法では、標本に対する敷居を下げるという意味で、樹脂封入標本は非常に良いモノであることを改めて学びました。

これまでクリスタルレジンは作成したことがありましたが、それよりも安価で、かつホームセンターで購入できる材料でできることが驚きでした。自分でも他の標本を封入してみたいと思いますが、封入状態にもっていくまでの過程が少し悩みかなとも思っています。乾燥状態や変色、凍結乾燥の手法など。今後は自身の経験次第だと思いますが、いずれにしても今後は館内展示や地元の子どもとの環境教育に取り入れていきたいと思います。

小さい子どもなども、実際に触って、様々な角度から観察できる事で、生き物や自然についての学びが広がるきっかけになると思いました。また、普段は気持ち悪いと触れない昆虫などにも、より近い距離で観察でき、釘付けになりました。今迄は見るだけだった標本が、より身近に感じられる実習でした。

封入する際のサンプルに施しておく前処理の方法について、講師の試行錯誤に基づいた独自の方法は、参考文献等では記載されていないことも多く、大変参考になった。

Q. 樹脂封入標本以外にも、様々な標本の種類や活用についても紹介しました。印象に残っている話などあれば教えてください。

・「標本制作は博物館の限られたスタッフだけでは出来ないので、地域の方々がそれぞれ制作できるようになればいい」といった普及啓発を同時にされている活動自体に感銘を受けた。
・本来、標本は永久保存するための物と思いがちだが、直接触れにくいもの（EX: ゴキブリや繊細な足を持つ昆虫など）を実際に手に取ることが出来るということも大きなメリットだと思った。

シートプラスティネーションが曲げられるので柱に展示できるという話が印象に残っています。立体物でも壁などに貼り付けられるのは空間を有効的に使えてよいと思いました。

昆布などの食材についても、地域の文化がどのように他の地域とつながりあい、生かされているのか、レイアウトや標本の見せ方次第で、見方や興味を持ってもらえるかが変わり、大変興味深い話しでした。

Q. 今回の研修のご意見・ご感想について

研修内で紹介されていた道具・材料について、いくつかは早速手に入れ、今回作製した標本の研磨を始めています。教えていただいた内容を忘れてしまわぬように、近いうちに近場の参加者に声をかけて振り返りの体験をしてみたいと思っています。

博物館の展示に活用できるワークショップは、大変役に立つと感じました。今後も、様々なワークショップを開催していただけると嬉しく思います。

講師の先生のお話しも興味深く、また標本そのものに興味のある方々が集まっていたので、非常に楽しかったです。ありがとうございました。

講　師　紹　介

兵庫県立人と自然の博物館
主任研究員
三橋 弘宗

【道北地区】

【網走地区】

科学館的ミュージアム・マネジメント（事業点検編）
～人と科学をつなげるサイエンスコミュニケーションを目指して～

北海道青少年科学館連絡協議会

概要、テーマ、ねらい

科学館では、地域の方々に科学や科学技術を伝えることや子どもたちに“科学する心”を育むことなどを目的に、さまざまな取り組みを行ってる。一方で、社会や地域のニーズは多様化し、応えきれていない課題がある。今回の研修では、改めて私たち科学館のミッション達成のためにどのような視点が必要なのか、また、よりよい事業を行うための企画のポイントや自己評価の進め方など、これからの科学館に求められる取り組みについて考える。

なお今回の研修では各館の教育プログラムの情報共有の機会を設けたり、グループワークをしたりと、参加者同士の意見交換や交流を重視して進めていくこととした。

会場と参加人数

会　　場　札幌市青少年科学館
参加人数　北海道青少年科学館連絡協議会加盟館、
　　北海道博物館協会加盟館　計17施設23名

スケジュール

11月15日	
14:30 ～ 14:40	イントロダクション 参加者自己紹介等アイスブレイク
14:40 ～ 15:30	講義① 「博物館におけるサイエンスコミュニケーションとは」 小川義和（国立科学博物館）
15:30 ～ 15:40	休憩
15:40 ～ 15:45	グループワークに関する紹介
15:45 ～ 16:00	札幌市青少年科学館事例紹介 （子どもたちと一緒に科学館づくり）
16:00 ～ 16:50	グループワーク①　各施設の事業の把握
16:50 ～ 17:00	初日のとりまとめ

11月16日	
9:00 ～ 9:20	講義② 「学習支援事業を分類する」 小川達也（国立科学博物館）
9:20 ～ 10:20	グループワーク②　事業の分類軸の検討
10:20 ～ 10:30	休憩
10:30 ～ 11:30	各グループからの発表
11:30 ～ 11:50	質疑応答、意見交換
11:50 ～ 12:00	まとめ

研修の実施にあたって　－ 運営者からのコメント －

●開催にあたって工夫した点

•「サイエンスコミュニケーション」という概念をわかりやすく紹介するため、タイトルや研修内容を説明する文ではできるだけ専門用語を避け平易な表現とした。

•事前に事務局担当者が国立科学博物館で行っているサイエンスコミュニケーション講座の一部を見学できたことで実施にむけたイメージが明確になり、その後の準備がスムーズに進んだ。

•サイエンスコミュニケーションの事例紹介では、札幌市青少年科学館が行った子どもたちの意見を取り入れた学習プログラムの企画立案の事例を取り上げた。子どもたちが企画に参加した文房具を使ったワークショップ（消せるペンの仕組み）を紹介した。

●開催にあたって苦労した点

•企画から実施まで国立科学博物館の全面的なサポートによってスムーズに進み、特に苦労はなかった。

●実施してみての感想や意見

•北海道青少年科学館連絡協議会で開催している例年の職員研修と比べて多くの施設が参加し、各館の取り組みを広く情報交換することができた。

•参加者層は 20 ～ 50 代と幅広く、職歴も今年度採用の新人からベテランまで幅広く参加したことで、多様なものの見方や考え方がカタチになるワークショップ形式ならではの良さがでたのではないだろうか。

•タイトルに「科学館的ミュージアム･マネジメント」と銘打ったが、科学館だけではなく自然史系博物館や動物園など広く博物館全体で役立つ内容だった。例えば、動物園では動物の生態や環境問題に関する教育プログラムを行っていたり、美術館では科学をテーマにした現代美術作品の展示や子ども向けの工作会を行うなど科学館の活動に近いものもあるので、科学館に限定せずさまざまな分野の博物館にも参加してもらうことも良いのではないか。

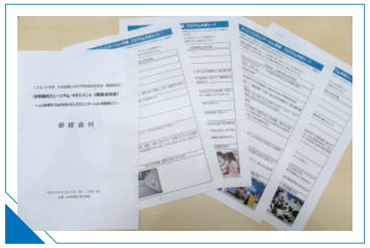
●実施に必要な物品、環境等

•プロジェクター、パソコン、ホワイトボード、マジック

•模造紙、付箋

●担当者連絡先

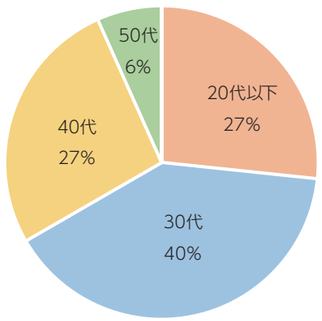
北海道青少年科学館連絡協議会
事務局　木野
（札幌市青少年科学館　TEL：011-892-5001）



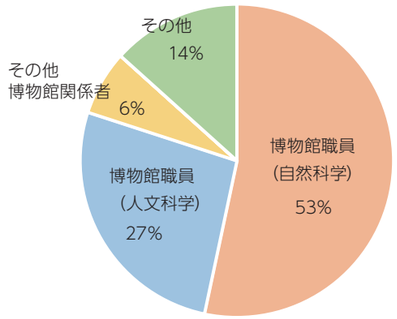
科学館的ミュージアム・マネジメント（事業点検編）
～人と科学をつなげるサイエンスコミュニケーションを目指して～

―研修参加者の声―（参加者アンケートより抜粋）

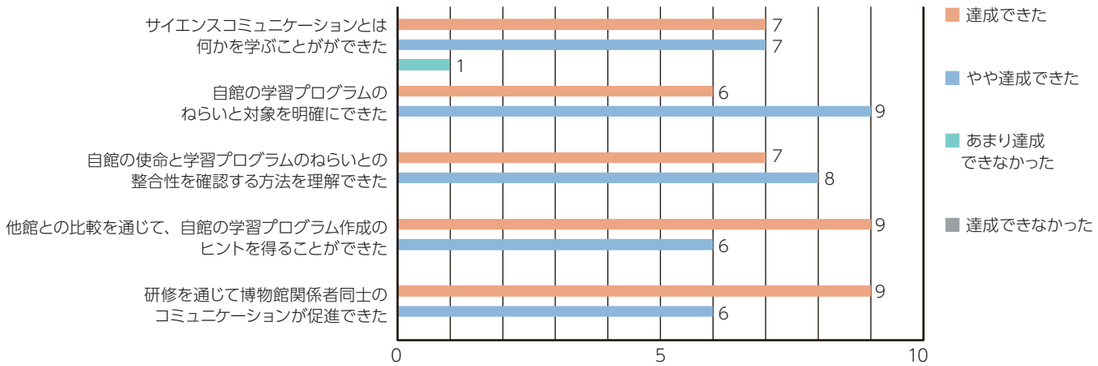
Q. 年代を教えてください。



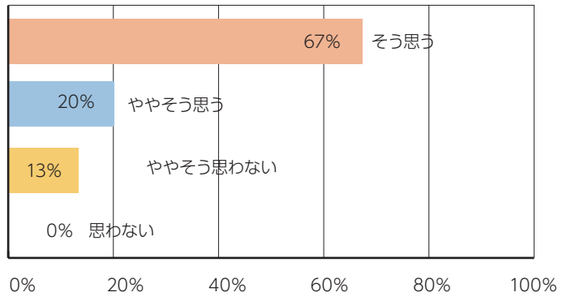
Q. ご職業を教えてください。



Q. 今回の研修に参加してみて、各目標をどの程度達成できたと思われますか？



Q. 今回の研修で得られたノウハウを、今後の自館の活動に活かすことができそうですか？



Q. 上の質問で「そう思う」「ややそう思う」と答えた方にお聞きします。具体的にどのような活動に活かすことができそうか教えて下さい。

新規プログラムを構築していく際に、今回学んだ考え方などを取り入れていきたいと考えています。

来年度の行事計画の際に自分が担当する行事分について、より効果的になるよう考える助けになると思います。また、行事担当者に今回の内容を伝えることで館全体としてもより良くなるようにしたいです。

今まで実施してきた事業を総点検し、これまでターゲットとしていなかった年齢層や、不足していた事業の方向性を知り、不足している部分をこれからの博物館・科学館の運営で補うことができそうです。

Q. 今回の研修を受けて、気付いたこと、学んだことについて具体的に教えて下さい。

「サイエンスコミュニケーション」の意味の広さに驚きました。講義の中でもお話があったように、これからは博物館内だけにとどまらず、地域と広く連携することが、地域の博物館には求められていると思いました。

事業点検の必要性を理解できた。事業の廃止・継続を決定する際に今回学んだ方法を実施するのも一つの方法だと思った。また分類基準の軸を作ることは思っていたより大変であることが分かった。

サイエンスコミュニケーションを活かすことで、展示物に頼り切らない科学館ができる可能性に気付いた。

講　師　紹　介

国立科学博物館
連携推進・学習センター
センター長
小川 義和

国立科学博物館
事業推進部
学習課人材育成担当
小川 達也

博物館施設における多言語化

道南ブロック博物館施設等連絡協議会

概要、テーマ、ねらい

道南地方においては、函館市を中心に多くの地域で多数の訪日外国人旅行者が訪れている。博物館施設等へも訪日外国人旅行者が訪れているが、充分な多言語化が実施されているとはいえない状況にある。

この研修では、多言語化する場合の基本的な考え方について研修を通じて学び、実践につなげる。

会場と参加人数

会　　場　江差町保健センター
参加人数　多言語化に関心のある博物館施設関係者、観光関係者など26名

スケジュール

12月4日	
10:45 ～ 11:00	開会式
11:00 ～ 12:00	講義① 「多言語化の基本的な考え方」 佐々木秀彦（東京都歴史文化財団）
12:45 ～ 13:15	講義② 「外国人観光客を案内して感じる多言語化」 馬上千恵（英語講師・通訳案内師）
13:15 ～ 14:30	多言語化の現地見学
14:30 ～ 15:30	演習①「資料の本質を探る」
15:30 ～ 16:00	演習②「資料の本質を多言語化する」
16:00 ～ 16:50	ふりかえり
16:50 ～ 17:00	閉会式

研修の実施にあたって　－ 運営者からのコメント －

●開催にあたって工夫した点
多言語化の基本的な考え方を押さえながら、それぞれの博物館施設などにおいて実践することができるように、演習内容の目的を明確化した。

●開催にあたって苦労した点
主催が三者あり、講師への連絡調整も含めて詳細を詰めていくことに苦労をした。

●実施してみての感想や意見
研修会終了後、参加者から充実した内容であったとの感想をいただきうれしかった。演習の仕方を工夫すれば、より良い研修会となったと感じている。

●実施に必要な物品、環境等
机、椅子、PC、プロジェクター、マイク

●担当者連絡先
江差町教育委員会社会教育課　宮原
（TEL：0139-52-1047）

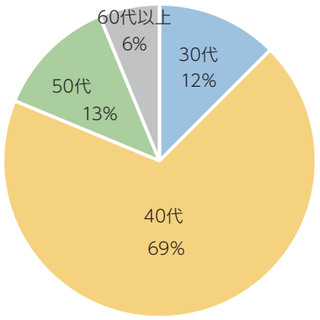
●講義で紹介された多言語音声翻訳アプリ
「VoiceTra」（無償）

http://voicetra.nict.go.jp/index.html
国立研究開発法人情報通信研究機構（NICT）　開発

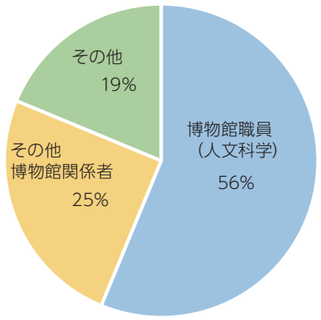
博物館施設における多言語化

―研修参加者の声―（参加者アンケートより抜粋）

Q. 年代を教えてください。



Q. ご職業を教えてください。



Q. 講義１　佐々木秀彦さんの「多言語の基本的な考え方」を受けてどのような気づきがありましたか？

外国人利用者がないため、気づかないことが沢山あった。特に安全管理として、緊急放送、避難誘導など英語でのアナウンスや誘導ができる体制は必要と感じた。

要望に対して、すべて応えなくてはならないという気負いが、多言語化へのハードルとなっていたのだが、そうではなく、できるところから、しかもシンプルな方が伝わることが多いことがわかり、それぞれの施設にあった手法を模索すればよい。という、根本的な所に気付けたのは大きい。多言語化＝単純な翻訳ではないこと

展示解説と誘導サインでは多言語の考え方を変えても良い（誘導は英語のみでも良い）とのことから、すべてを外国語対応するのではなく、必要に応じてピクトグラムや英単語レベルの設置から取り組めると感じました。

日本語キャプションの直訳では通じないということは常々留意していましたが、特に、歴史や文化財に関わる語句は日本人なら普通に知っていることも外国人に対しては吟味が必要であると改めて痛感しました。更に、本来は「訳す」のではなく、その地域の歴史や文化を理解しているネイティブの方に「書き下ろし」て頂くということも、これからは真剣に取り組み、そういった人材を見つけ、関係を築く必要性があるとも思いました。

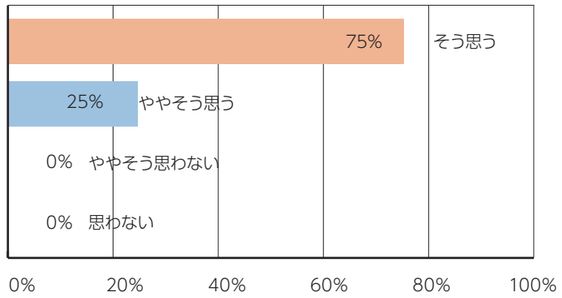
Q. 講義２　馬上千恵さんの「外国人観光客を案内して感じる多言語化」を受けてどのような気づきがありましたか？

日本語解説をそのまま翻訳することはNGであるとのご説明は、ある意味ショックであるとともに、まずはネイティブに文章を作成してもらい、次に英語を専門とする日本人にチェックしてもらうという段階を踏む必要があるとの説明をお聞きし、目から鱗でした。その他、英語表現のルールのご説明も大変参考になりました。

日本人が伝えたいことと、外国の方が知りたいことに違いがあること、解説文をそのまま英語に訳しても伝わらないということを改めて把握できた。

とりあえず英語化してあれば 60 点で、ないよりはマシと思っていたが、むしろ博物館の質を疑われるというのに驚いた。「使える！簡単厳選フレーズ」はすごく助かります。会話ではこれを使っていきたい（文章にする際は簡単すぎないように気を付けるとして、とっさに会話しなければならなくなったとき）。

Q. 今回の研修で得られたノウハウを、今後の自館の活動に活かすことができそうですか？



Q. 上の質問で、「そう思う」「ややそう思う」と答えた方にお聞きします。それはどんな内容か教えてください。特に、さっそく実施したことがあれば教えてください。

今回、東京都歴史文化財団の佐々木様からいただいた資料を参考に今後、当館の多言語化への基礎を固めるため、館内の職員による多言語化検討会を設けるとともに、今後においても馬上様とも連絡をとらせていただく予定です。

説明文（キャプション）を作成するグループワークが具体的にどう作成すればよいかイメージしやすくてよかった。

コスト面を考えなければ、活かしたいことばかりでしたが、まず取り組みたいこと、実施してみたことは以下の通りです。①現在のキャプション（日本語）の見直し②英語版案内（プリント）の見直し③ピクトグラムを使った表示。④地元学生、留学生との協働（英語の対応について）　など

ターゲットを想定して、その人に通じる解説を作成する。事業として小学生らを巻き込んでもおもしろいかもしれない。

Q. 今回の研修のご意見・ご感想について

外国人観光客は喜んでもらえると分かった。思ってた以上に言語に対してデリケートに感じていると知った。

馬上さんから教えていただいた5つのフレーズを基本としながら展示解説を考えることは、博物館資料の意義を見直すきっかけとなりました。その資料で何を表現したいのか、なぜその資料でなければならないのかを日頃から考えることの大切さを学びました。

●講義資料の１つ

「文化施設のための多言語対応ガイド」

[発行] 公益財団法人 東京都歴史文化財団

https://www.rekibun.or.jp/wp-content/uploads/2017/12/multilingual_efforts2017.pdf

講　師　紹　介

東京都歴史文化財団
企画担当課長
佐々木 秀彦

英語講師・通訳案内士
馬上 千恵

博物館の展示制作について考えよう

北海道博物館協会　道東３管内博物館施設等連絡協議会

概要、テーマ、ねらい

年に数回開催する企画展示の制作、常設展示のリニューアルなど、博物館活動において展示を制作する機会は数多くある。その一方で、実際の展示制作について学芸職員が実践的に学べる機会は少なく、各館で工夫しながら実施している。この研修では、博物館の展示制作の基本的な考え方について学び、また参加者同士が意見を出し合い、それぞれの実践例を共有することで、今後の活動につなげていくことをねらいとする。

会場と参加人数

会　　場　釧路市立博物館
参加人数　展示制作に関心がある博物館施設関係者
　　31名

スケジュール

2月20日	
13:00 ～ 13:30	イントロダクション
13:30 ～ 15:00	釧路市立博物館の紹介、展示解説１・見学
15:00 ～ 15:50	グループワーク１（展示の検証１）
15:50 ～ 17:00	講義「展覧会の作り方で留意したいこと」

2月21日	
9:30 ～ 10:00	洪氏の展示製作ノート紹介・解説
10:00 ～ 11:30	展示解説２、グループワーク２（展示の検証２）
11:30 ～ 12:00	演習・ふり返り

研修の実施にあたって　－ 運営者からのコメント －

●開催にあたって工夫した点

地域の学芸員のネットワークを強化できるように、道東３管内協議会非加盟館園にも広く声をかけ、普段あまり交流のない館園からも多くの参加があった。また、交流をスムーズにするため、参加者にネームプレートを配布し、グループ分けの際も進行が得意な人を各班に配置するように心がけた。

●開催にあたって苦労した点

内容については他地域の例をそのまま応用する形で検討したが、運営主務が同様の研修会に参加したことがなく、専門とする分野でもなかったことから、事前の調整が不十分なまま当日を迎えてしまった。運営主体が道東３管内協議会なのか、レガシー事業実施者なのか、確認できていなかったことも要因のひとつである。ファシリテーターは一般参加者にはならず、経験者や実績のある人が専任で務めることが望ましい。進行がもっとスムーズだったならば、参加者の学びがもっと深まったのではないかと思う。

●実施してみての感想や意見

研修会のテーマに対する成果ではないが、博物館・科学館・動物園・水族館・文学館・ビジターセンターといった、さまざまな規模・分野の学芸職員が参加できたことが大きな成果だったと考えている。グループワークについて進行が流動的になってしまったという反省点はあるが、参加者の反応は全体的に良好であったように思う。研修会を実施した釧路市立博物館の常設展示が建築と展示の融合という点や、地域の中では規模の大きい展示であるという点で特殊ではあったが、アンケートによると参加者自身の館の規模や展示内容にも反映できる学びがあったようである。

●実施に必要な物品、環境等

物品：ネームプレート、付箋紙
環境：十分な広さのある部屋（講堂など）、
　　適宜動ける人員

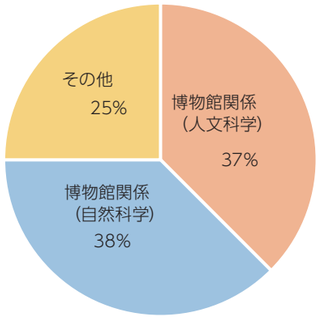
●担当者連絡先

釧路市立博物館　加藤ゆき恵
（TEL：0154-41-5809）

博物館の展示制作について考えよう

―研修参加者の声―（参加者アンケートより抜粋）

Q. ご職業を教えてください。



Q. 講義やグループワークを通じて、どのような気づきがありましたか？

伝えたいコンセプトを作る仲間としっかりとにぎりあうことやメインテーマをしっかりと決めるなど基本的だけどそれが大事ということを実感しました。
そして、それを伝えるためにより効果的なデザインを考えること、デザインがすてきではなく伝えるために伝えるためのデザインということを考えさせられました。

企画展などを企画する際に、予算の問題や、タイムスケジュール上実現可能か、などが先行してしまうことが多いのですが、最初にゆるぎないテーマ・コンセプトを決めることの重要性を再認識しました。

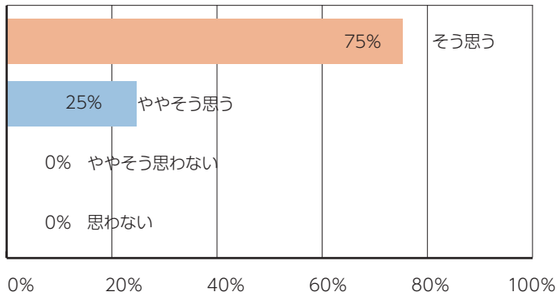
学芸員からコンセプトを聞いた上で実際に展示をみんなで観覧し、講義を聞いた上で再び展示を観るというプロセスは新鮮で、とても効果があると感じました。互いに展示を観ながら議論する事の重要性を再認識でき、その場でなければ気付かないことなどをいかに記録し、今後に活かすかを考えないといけないと思いました。

コンセプトをしっかり持つことの重要さを改めて感じました。１つ１つの展示、そしてその展示が全体の中で占める役割、つながりを可視化し、伝える手法、導線等をつくりあげるプロセス、思考方法を学ぶことができました。小さい館、制約がある中でも十分に伝える展示をつくり出すことができると勇気付けられました。メンターの重要性も痛感しました。

展示の根幹。企画展示におけるコンセプトの意識が変わった。最後は利用者の目線で考えること。何を伝えたいかを掘り下げる必要性。

職場内での経験から、漠然と展示作りを進めてきたことを深く反省する機会となった。私の職場では、チームを組んで展示作りを進めるので、チーム内でのコミュニケーションをこれまで以上に大切にしていきたい。

Q. 今回の研修で得られたノウハウを、今後の自館の活動に活かすことができそうですか？



Q. 上の質問で、「そう思う」「ややそう思う」と答えた方にお聞きします。それはどんな内容か教えてください。特に、さっそく実施したことがあれば教えてください。

特別企画展の企画段階で、担当学芸員だけでかかえ込まずに、職場内で議論する。当たり前のことだと思うが、できていないことがほとんどだったので、今後意識的に行いたい。

今回の研修は展示の評価に通ずる内容だと理解した。完成した展示（企画展示）について、館内の職員で「I like」と「I wish」を軸にした研修会（検討会）を実施したい。

テクニックだけでなく、ハートを伝えられる展示になるようにしたい。まずは企画展等から。

1つ1つの展示、全体の展示の伝えたいメッセージを再考し、見せ方を改善していければと思います。又、来館者や他の職員から展示のコメントを得られるような仕組ができないかと。

Q. 今回の研修のご意見・ご感想について

人と一緒に展示をする方法について、洪先生に個人的に聞けてよかった。

展示準備をまず物の選定から始めるようなところがありますが、コンセプト決定→空間配置→物の選定という流れもあることを知れて良かった。

生物と、その生息環境そのものをどのように見せるか、（ビオトープ等に）応用していけたらと思う。飼育動物は個々の個体を見がち、見せがちであり、そこからどのように種や生息環境、人間との関わりに目を向けてもらえるか。今後、手法を活かしていけると思う。

講　師　紹　介

東京大学総合研究博物館
特任教授
洪 恒夫

シンポジウム
「地域の情報発信拠点としての博物館 ―観光と博物館の連携をさぐる― 」

【道央地区博物館等連絡協議会】

概要、テーマ、ねらい

近年、外国人観光客の増加、観光のスタイルの変化に対し、観光による地域活性化などの取り組みが増加しつつある。その中で、歴史、くらし、自然、芸術など、地域資源にかかる「もの」と「情報」を集約、発信している博物館への期待は大きい。地域資源の情報の集積・発信拠点である博物館が、どのように「観光」と連携してゆくべきかというのは、喫緊の課題のひとつである。本シンポジウムでは、博物館、観光業界などそれぞれの立場からの意見を共有し、相互に対する理解を深めることで、互いの強みを活かし、観光客、利用者、地域住民にとって意味のある望ましい連携の在り方について議論する契機となることを目的とする。

会場と参加人数

会　　場　北海道博物館
参加人数　参加者 56人

プログラム

平成 31 年 1 月 18 日（金）　13：00 ～ 16：30		
基調講演	「観光立国時代における博物館の役割」	北海道博物館 石森　秀三
講　演1	「沖縄観光における財団の役割と沖縄美ら海水族館の取り組みについて」	(一財) 沖縄美ら島財団 並里　力
講　演2	「観光業界からみた博物館への期待」	(公社)北海道 観光振興機構 田中　洋一
講　演3	「博物館から見た観光と利用者」	小樽市総合博物館 石川　直章
パネル ディスカッション	「地域からの情報発信と博物館」	司会 国立科学博物館 小川　義和 パネリスト 講演者４名

シンポジウム趣旨説明　　小川 義和（国立科学博物館連携推進・学習センター長）

本シンポジウムは文部科学省委託事業の一環として、北海道博物館協会を中心に、北海道博物館、国立科学博物館の協力で、学芸員の資質向上を目的として実施するものです。

観光には物見遊山もありますが、滞在型や学習型、ものづくりの観光など多様化が進んでいるます。その中で、博物館自体が観光資源というタイプの博物館があります。沖縄美ら海水族館はまさしくそうで、沖縄観光の目玉になっています。

一方で、地域全体が観光スポットという中で博物館を活用するタイプもあります。小樽がまさにそうです。この両タイプの事例から、博物館と観光の連携を考えたいと思います。

また、われわれが相手にするのは外国人を含む観光客ですが、地域住民も対象としています。つまり、外国人にとっても、観光客にとっても、地域住民にとっても実りある博物館と観光の連携があると思います。それをぜひ各地域で見いだしていただきたいと思っています。

基調講演

観光立国時代における博物館の役割

石森　秀三
（北海道博物館長、
北海道大学観光学高等研究センター特別招聘教授）

●北海道が抱える課題と展望

わが国は経済格差や人口減少などの問題が懸念されています。中でも北海道は他の地域と比べて人口減少率が高く、人手不足といった様々な課題に直面しています。これから北海道をどうやって課題解決先進地域にできるかが大きなポイントとなります。特にF（食料）、E（エネルギー、教育）、C（医療・介護）、T（観光、交通）という4つの観点が重要であると考えています。

私は、北海道は観光資源、観光魅力の宝島であると思っています。観光は、何かを観るだけではありません。幸せを感じる感幸、歓び交わる歓交も大切です。また、観光だけが勝手に変わるわけではなく、ライフスタイルが変わることで観光の在り方も変わります。そういう状況の中で博物館が注目される時代が到来しています。

●「稼ぐ文化」の時代

日本では観光が長らく軽視されてきましたが、ようやく変わってきました。そのきっかけになったのが2003年、当時の小泉政権が発足させた「観光立国懇談会」でした。私はこの懇談会の委員を務めて、何度も首相官邸に出向いて、最終的に報告書の中の「観光立国の理念」を起草しました。観光が国家的課題と認められ、後に観光庁も設置されました。2016年3月には、安倍政権が「明日の日本を支える観光ビジョン」を発表しました。インバウンドの数を2020年に4,000万人、2030年に6,000万人にする目標を掲げ、大きく踏み出しています。その中で特に、文化財を保存優先から観光客目線で理解促進・活用することが重要課題とされています。それから、安倍政権は2017年6月の「骨太の方針」で、文化芸術・観光・産業が一体となって新たな価値を創出する「稼ぐ文化」への展開を掲げました。

もう一つ重要なのは、2019年4月施行の文化財保護法改正です。これまで文化財行政事務は教育委員会に任されていましたが、それを首長部局に置くことが可能になります。そうなると、文化財行政、観光行政、まちづくり行政が緊密に連携を取ることができます。ただし、首長部局の判断だけでなく、地方文化財保護審議会を設けてチェック機能を持たせます。

今後の日本の観光・文化行政は、博物館との絡みで考えるとさまざまな変化が起こるでしょう。中でも、カネとヒトの問題が重要になると思います。文化庁予算は近年1,000億円強で推移していましたが、来年度予算は1,330億円（前年度比253億円増）と急増します。中でも「文化財を活かした観光戦略推進プラン」に約155億円が投入され、博物館を中核とした文化クラスターの形成にも予算が付きます。ですから、博物館関係者はそれぞれの博物館に適合する観光との関わり方について真剣に考える必要が生じています。

来年度の国の観光予算は前年度比2倍超の711億円に上ります。出国税（正式には国際観光旅客税）が導入されるからです。予算の大きな柱としては、「地域固有の文化、自然等を活用した観光資源の整備等による地域での体験滞在の満足度向上」に224億円が配分されます。特に、「文化資源（文化財等）を活用したインバウンドのための環境整備」に100億円が配分されるので、大きな変化が起こるでしょう。

一方、ヒトの問題も重要です。文化庁は京都移転を決め、地域文化創生本部を新設し、その中に「広域文化観光・まちづくりグループ」を置いています。しかし、地域における文化財の総合的保存・活用を担える専門的人財（ヘリテージ・マネジャー）が十分に養成されていないのが現状です。今後、民産官学の協働によって専門的人材の養成に力を入れる必要があります。

●博物館にとっての文化と観光

このように、これからの博物館学芸員は「稼ぐ文化」「稼ぐ観光」に対応していくことが求められています。しかし私は、「稼ぐ文化」政策に疑問を抱いています。稼げない文化こそ、本当は地域にとって大切だからです。稼ぐ文化に力点が置かれ過ぎると、稼げない文化がなおざりにされかねません。

そのような中で、博物館の社会的使命と「稼ぐ文化」「稼ぐ観光」への対応のバランスをうまく取りながら、それぞれの博物館をより良く発展させていくことが求められています。

シンポジウム「地域の情報発信拠点としての博物館 －観光と博物館の連携をさぐる－」

【道央地区博物館等連絡協議会】

講演①

沖縄観光における財団の役割と沖縄美ら海水族館の取り組みについて

並里　力
（一般財団法人沖縄美ら島財団企画広報部長）

●沖縄美ら島財団の理念

沖縄美ら島財団のねらいは、沖縄の自然・文化・歴史など魅力あふれる美ら島の輝きを、国や世代の垣根を越えた「御万人（うまんちゅ）」へ広め、地域社会に貢献することです。そのような理念のもと、国営沖縄記念公園とノウハウを合わせて「地域振興・地域連携の拠点として地域と歩む公園」を目指しています。美ら海水族館も公園の施設の一つです。

地域情報と人が行き来する地域を目指し、美ら海水族館を含む公園が北部地域（やんばる）の振興のエンジンとなって、豊かな自然・生活文化・見どころ・イベントなどを紹介し、公園や水族館をつかってもらおうという活動を、地域の方々と行っています。

●地域連携による利用促進

地元地域との連携ということで、例えば、素通り観光にならないよう水族館の周辺に宿泊していただくために、昨年夏から、期間限定で水族館周辺のホテルと連携し、「ナイトアクアリウム」夜の水族館を始めました。夕食後に水族館へ行けるとして非常に好評で、周辺ホテル宿泊プランなどの販売にも繋がったので、今後も期間限定ではありますが続けていきたいと考えております。

また自治体と連携した取り組みでは、地元の港周辺でしか食べられない地魚を通して提供する事業も関連会社にて実施しております。地元漁協には活魚をいち早く運ぶ技術がなかったので、水族館の魚輸送技術を活用して名護や本部の飲食店に活魚を販売しています。また、バスなど二次交通の利用促進も行っております。

インバウンドに関しては、言葉やマナーの問題があります。これについては一施設や当財団だけでは対応に限界があるので、沖縄観光コンベンションビューロー等といろいろと協議し、外国人向けのハンドブックを広く配布しております。又、旅行会社やレンタカー会社と連携し公園の楽しみ方のビデオも配信しています。

地域と連携した自然環境保全活動もいろいろと行っています。陸に打ち上げられたイルカやウミガメなどを保護するなど、希少動物・植物の保護を財団の研究センターがきちんと対応し、地域貢献に繋げるようにしております。

●誘客につなげる情報発信

広報は、目的（目標）や体制がしっかりしていないと、ぶれていきます。もちろん認知度アップと利用者増加という目標はあるのですが、地元の観光振興への寄与は非常に大きなテーマです。又、新たな観光資源の開発がなければ持続的な観光はないだろうと考えています。そのためにはまず、ニーズを把握しなければなりません。中でも旅行会社や観光関連団体などからの情報収集が大事になります。

成功事例として、「ジンベエジェット」を紹介します。水族館開館10周年のときに日本トランスオーシャン航空と共に実施しました。企業タイアップということで躊躇もあったのですが、県内企業でもある事と観光の振興、魅力発信の役割を果たしたいという思いが一致し、実現しました。翌年にはもう一機造ることになり、日本一早く咲く桜として有名な「やんばる」のカンヒザクラにちなんで、機体を桜色にしました。

沖縄の観光動向としては、外的要因として景況感の上向きで、特に来年、トランジット等を活用した訪日旅行の需要拡大もありまだまだ拡大していくでしょう。ハード面ではクルーズターミナルの供用開始などもあります。沖縄観光の課題は非常に多岐にわたりますが、その中でも、ボトム期の誘客を何とかしたいと考えていますし、リピーターの安定的確保、未体験層の開拓にも努めたいと思っています。美ら海水族館をはじめとする博物館機能をどう観光とつなぐことができるか、皆さんと検討していきたいと思います。

講演②

観光業界からみた博物館への期待

田中　洋一
（公益社団法人北海道観光振興機構誘客推進事業部次長）

●マーケティングの必要性

北海道の観光入込客数は2017年、過去最高の5,610万人でした。しかし、道外客は全体の15%にしかすぎず、1999年をピークに低迷しています。ですから、北海道観光はどちらかというとピンチだと私は思っています。

それは、消費が団体型から個人型に移る流れにわれわれが乗り切れなかったことが要因だと思います。デジタル化の波によって観光情報の入手が容易になり、お客さまの興味・関心も多様化・深化していきました。それにもかかわらず、その思いをくみ取れずに今までできたことが敗因だと思っています。

従って、われわれもプロモーションの仕方をもう一度考えなければなりません。そこで必要となるのがマーケティングです。今の時代はマーケットインで、皆さまの様々な興味・関心をしっかりとつかんでアプローチを考える必要があります。

●「ゴールデンカムイ」の活用

そこで、ターゲットにするユーザー（ペルソナ）を設定するマーケティング方法を使うことにしました。まず、20～40代の女性を狙って「女子旅クラスタ」を設定し、当時は御朱印をテーマにアプローチしました。その結果、テーマ性のあるものには興味・関心を示すのだということが分かってきました。

そして、この層に具体的に施策をぶつけてみようと考えたときに思いついたのが、テレビアニメ「ゴールデンカムイ」でした。原作は少年誌に連載されていたので、男性から圧倒的に支持されています。しかし、アニメ化によって女性の割合が大きくなったので、これで女性層を獲得しようと考えました。また、作品は全道が舞台であり、アイヌについても取り上げています。私たちはアイヌ文化をフックにして道内を広域周遊してほしいと考えていたので、「ゴールデンカムイ」が様々な面でぴったり来たのです。

そして、アニメの「聖地巡礼」の先進地である茨城県大洗町を視察したところ、一番大切なのは町民とファンのコミュニケーションであることが分かりました。しかし、「ゴールデンカムイ」が描くテーマはものすごく深いのです。開拓の歴史やアイヌ文化のことを観光業界の人たちに語らせるのはなかなか厳しいと思ったときに思いついたのが、博物館でした。単行本の裏にある取材協力一覧に、博物館がたくさん出ています。博物館の学芸員であれば、作品が描く深いテーマ（世界）をファンに語ってもらえるだろうと思い、スタンプラリーで回る箇所をほぼ博物館にしました。その結果、「舞台めぐり」という既存のアプリを使ったスタンプラリーの参加者数が、11月末時点で1万人に迫る勢いで増えたほか、参加者を対象としたアンケートをみると、「今回のスタンプラリーを通じて、普段なら絶対行くことのない博物館をたくさん見学した」という声や、「北海道の歴史・文化を知ることができた」という声が上がるなど、当初の狙い通りの効果を出すことができました。現地ツアーを行った際も学芸員の方々のそれぞれの語りが参加者に強く印象づけられたようです。男女比もほぼ1対1だったので、狙いどおりでした。

大英博物館で来年、「Manga マンガ」展が開かれるのですが、そのメインビジュアルに「ゴールデンカムイ」が使われています。海外でも漫画が一つの文化として定着し、日本を代表するキービジュアルとして使われることは、北海道にとっても非常にありがたいことだと思っています。

●教育旅行の誘致

今、学校教育の世界が変わろうとしています。新学習指導要領がこれから導入されるからです。ポイントは、新指導要領が教育旅行にも関わっていて、「主体的・対話的で深い学び」につながるような旅行をすることが明記されていることです。ですから、われわれがこれから教育旅行を誘致しようとしたときには、新指導要領に沿った深い学びを念頭に置かないと生徒を獲得できません。

そのため、その体験をするにはどんな事前学習が必要か、現地の方との対話的なメニューを作れるか、それが帰ってから何に役立つのかという視点を必ず持って、教育旅行の説明会を開くようにしています。こうなると、博物館や学芸員の役割は間違いなく重要です。これからはそういった形で連携していかないと、北海道観光のお客さまが増えないと思います。

シンポジウム「地域の情報発信拠点としての博物館 －観光と博物館の連携をさぐる－」

【道央地区博物館等連絡協議会】

講演③

博物館から見た観光と利用者

石川　直章
（小樽市総合博物館長）

●小樽観光の現状

現在、小樽の年間観光客数は800万人に達しています。1960年代は200万人程度でしたが、運河の整備が終わった年に小樽博覧会が開かれたことをきっかけに、小樽の皆さんが観光と初めて向き合い、観光都市小樽が生まれたのだと思います。

小樽市総合博物館は、かつて小樽市博物館と呼んでいた「運河館」と、旧交通記念館の「本館」からなります。運河館はとても小さな博物館ですが、ピーク時に年13万人の入館がありました。運河の整備が完了後、小樽は爆発的に観光客が増えたものの観光施設が十分にそろっていなかった中で、博物館が観光施設として選択されたため、小樽に行くとまずは博物館に行くという感じの観光が行われていました。その後次第に他の観光施設が整備されると、元の数字に落ち着きました。

●博物館の顧客とは？

小樽の年間観光客数800万人の中で、当館にいらっしゃるお客さまは年間15万人程度です。ですから、全体の1～2%が足を運んでくれているのですが、残りの98～99%のお客さまに対してどうするかということを考えなくてはなりません。

博物館の顧客＝来館者とした場合に、来館者の需要はどこにあるのかを調査しました。本館は家族連れが圧倒的に多く、運河館は成人の家族連れ、一人客、カップルが多いというふうに形態が異なっていました。来館の動機も、本館は「子供のため」「鉄道」が多いですが、運河館は観光目的の他に、「なし」と答える人が多かったです。つまり、観光ルートとして来て、「こんなものがあるのか」と後で気が付くタイプの観光ということです。このように、2つの館で来館者の需要が異なることが分かりました。

一方、顧客を来館者以外と考えた場合、需要としては収蔵資料や学芸員そのものの利用、リファレンスや調査依頼、普及活動などにあり、市民よりもマスコミや商業関係者の利用が多くなります。先人たちの努力のおかげで、「情報は博物館にある」「博物館に行ったら何とかなる」という風に、市内外に認識されています。

こうした当館の能力や資産を使って成功したのが、「ゴールデンカムイ」を活用した取り組みです。われわれは、アニメ化される前に企画展を開きました。企画段階ではこれほど有名になるとは思っていませんでしたが、開館前に行列ができたりもしました。

●博物館と観光

博物館が観光サービスに貢献できることは、人が集まるイベントを行うことだけでなく、正確な情報を提供することだと思います。和歌山市立博物館の館長を務めた寺西貞弘さんは、律令制の研究者でありながら和歌山ラーメンのことを研究していました。なぜなら、和歌山市立博物館はラーメン鉢一つさえ所蔵していないにもかかわらず、和歌山ラーメンの特徴や起源に関する質問が数多く寄せられたからです。寺西さんは、「分からないなりにも真摯に回答の準備をするのが公立博物館の学芸員のあるべき姿だ」と言っています。私たちが一番できることは、実はこういうことではないかと思います。

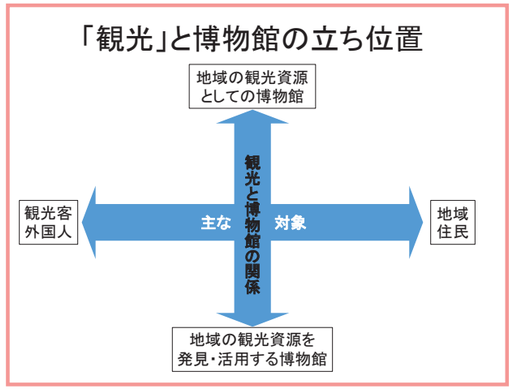
そこでわれわれは、廃業した定食屋の看板や小樽名物の「ニシンそば」の資料などを集めています。それから、小樽市内は夕日がきれいに見えるので、博物館で積極的にポスターや案内を作ってアピールしています。

博物館の強みは「博物館である」ことだと思います。地域の博物館は地域のために存在していますから、地域の観光を下支えする役割をわれわれは担っていると思います。ひいては、情報提供や調査のアドバイスをしていくことが、博物館がなぜその街にあるのかという存在意義を問い直すことにつながると思っています。小樽について言えば、街角や路地裏で近代化を発見する観光が小樽の観光ではないかと考えています。

パネルディスカッション　地域からの情報発信と博物館

司　　会：小川　義和
（国立科学博物館連携推進・学習センター長）
パネリスト：石森　秀三
（北海道博物館長、北海道大学観光学高等研究センター特別招聘教授）
並里　　力
（一般財団法人沖縄美ら島財団企画広報部長）
田中　洋一
（公益社団法人北海道観光振興機構誘客推進事業部次長）
石川　直章
（小樽市総合博物館長）

【小川】観光と博物館を考えた場合、博物館自体が観光資源として成り立つ場合もあれば、地域の観光資源を発見・活用する、観光資源の意味をきちんと説明する役割を博物館が果たすというパターンもあると思います。また、観光客、地域住民など、どの層をターゲットにするのかというのは、博物館の置かれた立場によって異なるだろうと思います。
ディスカッションでは最初に、パネリスト同士での質問や、ご自分が話した内容で意を尽くしていないところについて語っていただきたいと思います。



●博物館の位置付け

【石　森】当博物館のある野幌森林公園は、北海道百年記念事業の一環として整備されました。そのために、博物館自体は地域住民の利用が多いわけです。先ほど小川センター長がおっしゃったパラダイムで言えば、同じ公園内の「開拓の村」はまさに観光資源としての役割を果たしており、当博物館は地域の観光資源を発見・活用する役割を担うという位置付けになります。

【並　里】私たち財団は首里城公園も管理運営しており、そちらは歴史的なものが主です。ですから、歴史文化を掘り下げて、きちんとした情報の裏付けを持って発信する役割があります。今日は皆さまの意見も聞きながら、観光資源としての文化観光を考えてみたいと思います。

【田　中】美ら海水族館が沖縄観光のエンジンになっていることは非常に面白いと思いました。大きな誘客効果を持つ博物館が、周辺の観光協会と連携しながら自分の役割を考え、泊まってもらうための仕組みづくりなどに関わっている。私たちもこうしたことにもっと手を携えていきたいと思いました。知識の部分を深掘りすることは、私たちにはなかなかできません。ですから、その点で連携していけば情報発信の仕方も変わっていくと感じました。

【石　川】博物館が生き残るための戦略としては、やはり地域での存在意義を高めるしかないだろうと思います。小樽の隠れた魅力を当館で温めておき、機会があるごとに発信することが重要です。
美ら海水族館はとても大きな博物館ですが、内部の方々は専門性と観光施設についてどのように考えておられるのでしょうか。観光施設としての認識を皆さん持っているのでしょうか。

【並　里】私たちは、専門職である飼育員の方々とよく議論を交わします。マーケティングをしている側である私たちと意見の相違はあるけれども、飼育員や学芸員の意見を尊重しながら、社会一般的に伝えやすいものに仕上げていくことも私たちの仕事だと思っています。

【石　森】私どもが悩んでいるのは、2015 年に新たに開設した北海道博物館を軌道に乗せることで精一杯で、北海道全体への貢献を十分に果たせていないことです。美ら島財団は指定管理者として沖縄本島の入込客数約 800 万人のうち 700 万人を集めていますが、秘訣は何かあるのですか。

【並　里】特に秘訣はないのですが、財団では 3 本の柱を持っています。その中核が研究センターであり、そこで学芸員が専門的に研究した成果を、どうように観光情報として発信するかを考えており、それが好調な沖縄観光にすくなからず影響しているのではないかと思います。

【小　川】研究と観光は対立する概念に見られがちですが、財団では非常にうまく回っているように感じました。観光によって得られた収益を研究に使い、その成果を観光資源として活用できていると思います。

シンポジウム「地域の情報発信拠点としての博物館 －観光と博物館の連携をさぐる－」

【道央地区博物館等連絡協議会】

●ブランディングの秘訣

【田　中】 美ら島財団では、沖縄観光コンベンションビューローや地元の観光施設と積極的に意見交換をされているのではないかと思います。そのあたりの取り組みについて教えてもらえますか。

【並　里】 美ら海水族館が 10 年目を迎えたとき、「素通り観光の拠点になっている」という地元の声が多くあったので、とにかく地域の意見を吸い上げ、地域に何が必要なのかを収集することにしました。
沖縄観光コンベンションビューローは県の観光振興を担っている組織なので、次に目指している事業とベクトルを一緒にし、場合によっては先読みするようにしています。そのためには、情報収集と地域の方々の意見を聞くことが重要です。

【並　里】 小樽は非常にブランディング化ができていますが、ブランディングの基本設計はあるのでしょうか。

【石　川】 都市計画と歴史建造物の保全制度はあります。その中でルールの根底にあるのが小樽運河の保存運動だと思います。観光地として知られるようになったのは、間違いなく運河論争とその後の整備にあります。ですから、実は観光地として 30 年しか歴史がないので、いまだに試行錯誤しています。その中で歴史、特に近代史が小樽の魅力の一つだと考えています。

【石　森】 野田サトルさんの漫画「ゴールデンカムイ」が大いに話題になっています。「ゴールデンカムイ」のさまざまなところで開拓の村を題材にしていただいて有り難いのですが、漫画の権利関係は厳しいので、今のところ「ゴールデンカムイ」をより良く活かすことができていません。いい方策はないでしょうか。

【石　川】 集英社に行って「使わせてくれ」と当たってみるしかないのではないかと思います。逆に集英社を超えれば堂々と使えますので、ぜひ一度当たってみてはいかがかと思います。

【田　中】 私も、集英社や製作委員会に都度確認しています。あくまでもアニメや漫画はフィクションであり、「この場面はこの場所」というふうにあまり指摘してほしくない部分があるので、表現を変えているところもあります。いずれにしても対話が重要だと思います。

●会場からの質問

【小　川】 会場からの質問です。地域の小さな郷土博物館の活用方法についてアドバイスをお願いします。

【石　川】 一足飛びに観光と小さな資料館を結び付けるのは困難だと思います。単館では難しいと思うので、きちんとネットワークをつくることが重要だと思います。

【石　森】 国は「稼ぐ文化」に力を入れていますが、重要な文化遺産は、所有者が亡くなると散逸せざるを得ないことも現実なので、その辺をきちんとすることが重要です。日本遺産に象徴されるように、ストーリー性を考慮しながら、地域の文化財の総合的保護・活用をみんなで考えなければならないと思います。

【小　川】 観光人口が増え過ぎると、オーバーツーリズムで様々な問題が起きます。対策はどうしていますか。

【並　里】 バスなどの二次交通の活用やピークシフトに取り組んでいます。美ら海水族館周辺は昼過ぎにお客さんが増えるので、朝夕にピークシフトするため、イベントの時間帯を飼育員と一緒に考えて行っています。

【田　中】 北海道も同じような状況が起こっていて、季節偏在と地域偏在が生じています。
季節偏在の問題では、北海道は閑繁の差が激しく、夏以外の誘客が大きな課題です。それから冬も、雪まつりと旧正月が一緒になると外国人観光客がピークになるので、そこをどう散らすかが課題です。「ゴールデンカムイ」のスタンプラリーのように、季節にあまり関係しないもので平準化を進めなければならないと考えています。
地域偏在の問題は、札幌に集中していることです。例えば道外の旅行会社に対し、下期に地方空港を使う商品を作ったら宣伝費を助成したり、道東や道北の素材を取り上げたら宣伝費を助成するという様に、少しでも分散させるための取り組みをしています。また、道内 7 空港が民営化されるので、地方空港を活用することで道央・札幌圏の負荷を減らすことも考えています。

【小　川】 文化・歴史・資源を可視化する上でデジタル活用の可能性についてお聞かせください。

【石　川】 当館では写真については 7 割くらいはデータベース化をすすめました。ただ、資料については 3D の情報をのこそうとすると、デジタル化する手間の問題が大きいと思います。一点一点デジタル化すると何年かかるか分かりません。ただ、デジタル化すると本物を出さなくて済むので、とても使いやすいのです。デジタル化はとても重要だと思うので、今後取り組んでいきたいと思っています。

【小　川】 15 年ほど前に日本でも進みつつあったのですが、デジタル化することで博物館に本物を見に来なくなるのではないかという恐れがあって、なかなか踏み切れませんでした。そのため、日本の博物館のデジタル化は遅れています。その点では大きな課題だと思っています。やはり誘客・デジタル化・資源化をセットで考えていかないと、なかなか難しいと思います。

●観光と博物館の連携

【小　川】 最後に、観光と博物館との連携の在り方について一言ずつお願いします。

【石　川】 地方の博物館にできることは限られていますが、地域に存在する以上、その地域の情報は全て掌握しておく必要があるでしょう。そのアウトプットをどうするかが今後の課題になっていて、利用しやすい情報の出し方を考えていく段階に来ていると思います。

【田　中】 石川館長のおっしゃったアウトプットの部分を私たちはしっかりフォローして、道外含め様々なところに情報発信していく必要があります。それが具体化しているのが沖縄の取り組みだと思ったので、今後連携するに当たって、まずは対話を大切にしていきたいと思いました。

【並　里】 博物館機能を持つ水族館としては、この地域にどういう立ち位置でいるのか、地域のために何ができるのかを常に考えるようにしております。そして、どこの地域においても、観光協会、行政、商工会といった垣根を超えた話し合いは重要だと思っています。

【石　森】 私どもは、野幌森林公園という貴重な自然の中に置かれていて、北海道博物館だけでなく、野外博物館としての北海道開拓の村も重要な文化施設です。そういうものをより総合的に活用し、北海道を理解するための重要なメディアとして発展させていきたいと念じています。

【小　川】 観光は、ある面で地域の総合力の現れだと思うので、博物館も協力すべきですし、博物館側からすれば逆に、観光を活用して博物館の情報を発信することを考えていくといいのではないかと認識しました。
本日を観光と博物館のコミュニケーションの始まりと考えていただければと思います。4 人のパネリストの方々、どうもありがとうございました。

シンポジウム参加者の声（抜粋）

Q. 本日のシンポジウムの感想を教えてください。

観光側、博物館側の両面の視点からの話を聞くことができて大変参考になりました。

それぞれの視点から博物館と観光について知ることができた。観光の対象もニーズも形態も時代と共に変化している事から、昔のものを今、見られるというだけのスタンスでは続けていけないと感じた。

札幌圏での話に加え、美ら海（沖縄）からに関する内容を聞くことができて良かった。また、二者でだいぶ観光客と博物館の関係に関する取り組みに大きな違いがあったので、聞いていて参考になった。

学生指導（学芸員養成）の中に観光と博物館というものを入れていく必要を感じた。

地域によって抱える観光の取り組み方が異なり、その地域にあった事業を考えて実行する難しさを知ることができました。また、時代の流れに合わせて先読みし、いかにその時代に合わせた取り組み方を生かしていくかが鍵になるのかなと感じました。なかなかこういった話を直で聞くことがないので、貴重な時間を過ごすことができました。

Q. 特に印象に残った内容やテーマなどありましたら教えてください。

水族館の話がとても印象的であった。地域との連携が重要なのだということがよくわかった。

デジタル化が進む世の中において、インターネット等の検索では調べきれない情報を博物館（学芸員）が提供すべきだというお話が興味深かったです。

巡回展
「生命のれきし ―君につながるものがたり― 」

本事業では、北海道内の博物館関係者を対象とした研修やシンポジウムを行う一方、地域博物館と国立科学博物館の協働で、展示や学習プログラムの実施も行った。事業の実践を通じて、学芸員同士が出会い、お互いのノウハウを学び合うことで、それぞれの博物館の今後の活動を魅力的なものにするということをねらいとした。

展示にあたっては、地球の誕生から現代までを化石を中心とした資料で紹介する国立科学博物館の巡回展示「生命のれきし―君につながるものがたり―」を２館で実施した。本展示は、国立科学博物館の資料７３点を活用し、資料とパネルをセットとして制作した組立型の展示物である。会場および会期は以下のとおり。

会　　場	会　　期	日　　数
北海道博物館	平成 30 年 12 月 8 日～平成 31 年 1 月 20 日	31 日間
北網圏北見文化センター	平成 31 年 1 月 29 日～平成 31 年 3 月 3 日	33 日間

巡回展　展示概要

●展示タイトル

「生命のれきし –君につながるものがたり–」

●概要

地球が誕生してから46億年。私たち現代の人間が誕生するまでの間、地球やそこに住む生き物たちはどのような道のりを歩んできたのでしょうか。約38億年前の地球最古の岩石、ようやく現れた大型生物エディアカラ生物の化石、陸上に進出した植物化石や、恐竜の全身骨格、そして私たち哺乳類の化石などの標本・資料と一緒に、地球のれきし・生命のれきしをたどる46億年のものがたりを紹介する内容です。

■主な資料■

オデッサ隕石

アノマロカリス

始祖鳥産状化石

ニッポノサウルス

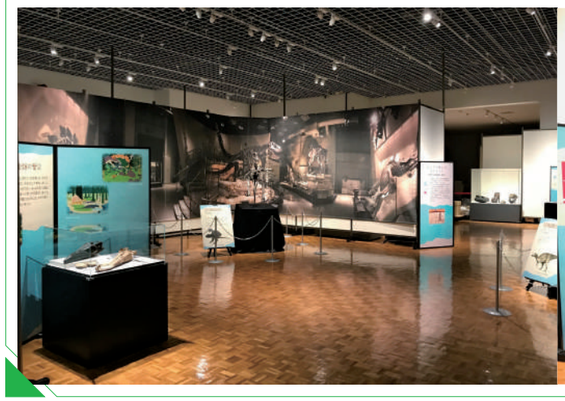
デイノニクス

パレオパラドキシア

北海道博物館での実施

北海道博物館では特別展会場において本展示を展開した。展示自体は特別展会場だけで完結はするものの、「えほんmeets博物館」や「始祖鳥をつくってみよう！」など、巡回展示の内容と北海道博物館の総合展示室（常設展）内の展示とをうまく結びつけるようなイベントを実施することで、より一層、博物館の魅力を感じてもらえるような工夫を行った。

入場者数	13,101 名



実施イベント

えほんmeets博物館

日　　時　①平成30年12月15日　10：30～11：30
　　②平成31年1月19日　　10：30～11：30
　　講師：圓谷 昂史（北海道博物館）
　　（①は国立科学博物館の職員も立会い）
対　　象　５歳～小学校３年生以下のお子様と保護者(２名１組)
参加人数　①9組18名　②9組17名　計35名

ちゃれんが子どもクラブ「始祖鳥をつくってみよう！」

日　　時　①平成30年12月16日
　　［第1回］10：30～12：00
　　［第2回］13：30～15：00
　　②平成31年1月20日
　　［第3回］10：30～12：00
　　［第4回］13：30～15：00
講　　師　表　渓太（北海道博物館）
対　　象　小学生・中学生（小学生以下は保護者同伴）
参加人数　計119名

アロサウルスになってみよう！

日　　時　平成31年1月5日～平成31年1月12日
　　各日13：30～15：00
講　　師　圓谷 昂史（北海道博物館）
対　　象　どなたでも
参加人数　計492名

巡回展「生命のれきし　―君につながるものがたり―」

北網圏北見文化センターでの実施

北網圏北見文化センターでは、常設展示室にデスモスチルスの全身骨格等が展示されているため、常設展示室の内容と合わせて本展示を展開した。これにより、常設展示室で展示されている古生物資料について、改めて来館者に見ていただくきっかけとすることができた。

入場者数	2,025 名

実施イベント

●化石のレプリカをつくってみよう！

日　　時　①平成 31 年 2 月 9 日
　　［第 1 回］10：30 ～ 12：00
　　［第 2 回］14：00 ～ 15：30
　　②平成 31 年 2 月 23 日
　　［第 1 回］10：30 ～ 12：00
　　［第 2 回］14：00 ～ 15：30
講　　師　中村 雄紀
　　（北網圏北見文化センター）
対　　象　どなたでも
参加人数　計 120 名

●ギャラリートーク

日　　時　①平成 31 年 3 月 2 日
　　13：30 ～ 14：00
　　②平成 31 年 3 月 3 日
　　13：30 ～ 14：00
講　　師　中村 雄紀
　　（北網圏北見文化センター）
対　　象　常設展観覧者
参加人数　計 78 名

事業の効果

どちらの開催館でも、前年同期比で2倍以上の入場者数が訪れた。国立科学博物館の標本だけでなく、地域博物館の持つ資源（常設展示）をあわせた博物館活動を展開することが功を奏したものと思われる。結果として、来場者満足度が 84% を超える（北海道博物館）など、魅力ある博物館活動を、地元の方々に届けられたと思われる。

また、協働事業の実践を通じて学芸員同士が出会い、学び合うことで、それぞれのノウハウを共有し、双方の今後の活動への刺激とすることができた。これらのネットワークを今後も維持・発展させていくことが期待される。

その他の関連イベント

本事業を展開する過程で、展示と関連づけたイベントも行った。ここでは道央地区の三笠市立博物館、滝川市美術自然史館、北海道博物館の3ヶ所で、国立科学博物館とともに実施した未就学児向けのイベント「えほんmeets博物館」を紹介する。

●「えほんmeets博物館」の概要

❶ イベント「えほん meets 博物館」の開発

「絵本を持って親子で博物館をまわってみよう！」をテーマに、
絵本をきっかけとした常設展示の楽しみ方を親子に提案するイベントを開発。

point ❶ 豊かなイメージを持ち対象と向き合ってもらう。
➡ 絵解きのように挿絵から物語を楽しむ方法を提示。
→博物館の新たな楽しみ方に。

point ❷ 繰り返し親子で絵本を共有する時間の中で、豊かな会話を生み出してもらう。
➡ 担当編集者や監修者の思いなど、絵本にまつわる背景をその要素として届ける。→絵本に親しみを。

❷ イベント「えほん meets 博物館」の流れ

①絵本の紹介
②絵本のお話に関連する展示物をツアーのようにして回る
③展示物の案内や解説、観察や触察、ワーク等を通じて理解を深める
④まとめ

❸ 30年度までに実施した「えほん meets 博物館」＠国立科学博物館

●絵本：『せいめいのれきし－改訂版』
刊行：岩波書店
バージニア・リー・バートン　文・絵
石井桃子　訳／真鍋真　監修
→岩波書店と共同主催で実施

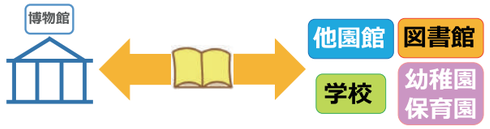
●絵本：『くらべてわけてならべてみよう！』
刊行：創元社
国立科学博物館　作／見杉宗則　絵
→出版元である創元社と共催で実施

●絵本：『はなのあなのはなし』
刊行：福音館書店
やぎゅうげんいちろう　作

❹ まとめ

●博物館と未就学児をつなぐ　→　そもそもの資源を活かして新たな利用者層の開拓に

●博物館と他施設をつなぐ　→　新たな手法の開発に



実施状況

①三笠市立博物館

企画展「せいめいのれきし」に関連させて実施
会　　場　三笠市立博物館
日　　時　平成30年9月23日　10:00～11:00
講　　師　真鍋 真（国立科学博物館）
対　　象　未就学児から小学生の子どもとその保護者
参加人数　16名（親子8組）

②滝川市美術自然史館

常設展示室に展示されたタキカワカイギュウの解説を含め実施
会　　場　滝川市美術自然史館
日　　時　平成30年9月24日　10:30～11:30
講　　師　真鍋 真（国立科学博物館）
　　矢作 絵里（国立科学博物館）
対　　象　未就学児から小学生の子どもとその保護者
参加人数　18名（親子9組）

③北海道博物館（再掲）

滝川市美術自然史館でのイベント当日に、北海道博物館の学芸員が立会い、視察を行った。滝川市での実施後、北海道博物館の常設展を含めたプログラムを検討して自館で開催した。
※日程等の詳細はP.41を参照

事業全体を振り返って

北海道内には博物館等の文化施設が約280館あり、その約半分弱の120館が北海道博物館協会に加盟しています。博物館数も多いので、研修を複数実施するとなると、事務局としては調整が必要とされますが、今回の研修が地域の博物館にとってとても必要であると考えました。

道内の博物館では学芸員が一人だけという館が多く、人文系の学芸員であっても自然史標本の寄贈の依頼があるといった、自分の専門以外の資料を扱わざるを得ない場面も多くあり、地域の博物館の方はすごく危機感を持っていました。さらに北海道は本州と離れているので、道外の研修に行って学ぶということが難しいという現状があります。

そういった現状があることから、逆に北海道博物館協会としての地域のネットワーク活動はものすごく活発です。やはり道外の研修に行けない分、各ブロックの活動というのは非常に盛んで、自分たちなりに研修会をこれまで行っていました。

しかしながら今回の研修の様に外部の専門家の方をお呼びする予算はなかったため、今回は、これまでの"内"からの学びに加えて、"外"からの学びを展開することができ非常に良い機会であったと思っています。研修の実施にあたっては、すぐに自分達の活動として活用できる内容を、という声があがっておりました。実施者側にそのことを意識した研修を行っていただいたおかげで、研修終了後に、参加者から「実際にこういったことを自館でやった」という声を聞いており、研修の内容を持ち帰って活用してもらえたのではないかと思います。それぞれの学芸員の方たちにとって、今回の研修を通じて、自館で何ができるのかと考える機会になったと思います。

北海道博物館からは若手を研修に参加するよう促しました。研修を通して様々な学びがあると同時に、研修後に地域の学芸員の方と話をし、情報交換をする機会があったということも大きかったと思います。研修以外でも、今回の巡回展示「生命のれきし」展を担当した若手学芸員が、「えほん meets 博物館」を自分でやってみるという、すごく積極的・意欲的に事業展開をするという動きもありました。その意味では、とても有意義な事業展開になったのではないかと思います。

自分が参加しなかった他ブロックではどのような研修がされていたのかということは皆さん知りたいという声が上がっています。このことについては、毎年開催されている北海道博物館大会等で、今回の事業総括を行い、事例共有ができないかと現在検討しています。

北海道博物館学芸員／北海道博物館協会
事務局次長
栗原憲一

実施結果の考察

【事業の効果】

●「学び」の場としての研修・連携事業

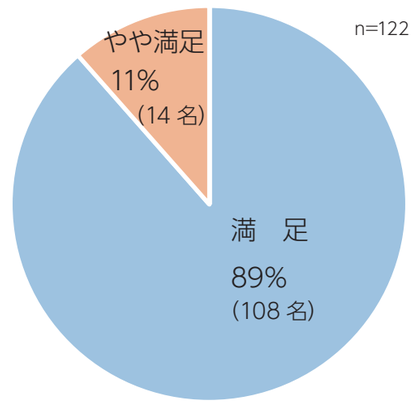
今回の一連の事業は、学芸員には様々な要因によって「学び」の機会が少ないという観点から、受講したいという希望が多かった研修やシンポジウムの実施、展示や学習プログラムの共同実施によるノウハウの共有などを行ったところである。

研修やシンポジウムにおける「学び」の内容としては、館にもどってすぐに活用できる実践的なもの、より広い視野で館の活動をとらえるための「考え方」「意識」を学ぶものなど、短期的にも長期的にも博物館の魅力向上につなげられるようなテーマを設定した。特に座学だけでなく、実習的な作業を盛り込むことによって、自館での活動につなげられるような内容とした。また講師に聞いてみたいことを事前に挙げてもらい、講師には質問内容を踏まえて研修に臨んでもらうなど、参加者の需要にあわせた内容を展開した。

その結果、「今回の研修が今後の参考になるか」という設問では、ほとんどの回答者が「そう思う」「ややそう思う」を選択。また、「今後自館で実施してみる」という声だけでなく、「すでに実施し始めた」という声も多く集まった。これは、研修を研修会場で終わらせずに、自館に戻ってから内容を振り返るきっかけにしてもらうために、アンケートをあえて研修終了後に web アンケートでとるようにし、研修で学んだことを改めて自館で考える機会としてもらうようにしたことも一つの要因ではないかと思われる。その結果、研修の満足度については、すべての研修参加者が「満足」「やや満足」を選択している。

研修を通じて、博物館での業務の向上が図れるという実感は、研修参加へのインセンティブに繋がり、今後このようなサイクルが継続することを期待したい。

【全体満足度グラフ】



【参考資料】

今回の事業全体を数的に振り返ると下のような結果であった。

研修等実施回数	8 回
研修等参加者数	257 名
講師参加者	15 名
巡回展示入場者数	15,126 名
展示満足度	84.2%（北海道博物館）
関連イベント参加者数	978 名

この他、数字には表しづらいが、研修や展示等の実施のために非常に多くの関係者が携わっている。学芸員一人一人の先には、その何百倍、何千倍もの来館者や事業参加者がいることを考えると、「将来の来館者」に向けた取組を相応の規模で行うことができたのではないかと思われる。

実施結果の考察

●「出会い」の場としての研修・連携事業

研修は個人のスキルアップの場でもある一方で、「出会い」の場としても非常に重要である。特に小さな博物館にとっては、自分で試行錯誤して実施している取り組みが、果たして標準的なものなのかどうかという不安を抱えながら日々の活動をおこなっているという声が、事前アンケートでもあげられた。こういった館にとっては、スキルアップもさることながら、他館の職員との直接的な交流、情報交換などの、ネットワークづくりが今後の博物館活動の支えになると思われる。評価WGでも、それぞれの館の事情について意見交換ができる場、いわば「しらふの懇親会」の重要性について指摘されており、今回の研修では、グループワークや意見交換の場を設けるなど、なるべく道内の参加者同士の交流の場を設定するよう設けた。

同時に、道外や博物館関係者以外の「出会い」の場ともなった。各研修や共同展示、プログラムを実施することで、講師や観光業界、共同事業を実施した職員同士など、直接的に顔をつきあわせることができたことも今回の成果の一つである。共同実施したプログラムを自館で発展させたり、さらなるプログラム開発に向けての交流が進んだりと、今後の博物館活動に寄与することが期待される。

この「出会い」は、参加者だけでなく各講師にとっても貴重な機会になったと思われる。北海道内で尽力している学芸員と直接対話することを通じて、現場の課題や苦労を知る機会となり、地域の博物館の悩みに寄り添いたいという思いを強くした講師もいらっしゃった。その講師がその思いを持って今度は別の地域で活動することとなれば、結果として北海道地区だけでなく他地域にもよい効果をもたらすのではないかと思われる。

研修参加者同士の交流

講師との交流

【今後の課題】

●北海道内での研修のフォローとさらなる発展

今回の事業を一過性にしないためにも、今回感じた研修の重要性や有効性を共有し、次年度以降につなげていく必要がある。研修を受けたことで博物館活動が実際に改善・変化した事例を集約し、共有することで、研修の有用性について受講者や地域博物館が実感できるのではとの指摘が評価WGにおいてもあった。そのような循環が働くよう、可能であれば追跡調査等によるフォローアップが望ましい。また、道内他地区での研修事業の内容を共有することで、「出会いと学び」への意欲を喚起していく必要がある。一部制作した、研修の映像なども活用しつつ、北海道博物館協会が中心となって、今後の各地区・部会の研修の支援を引き続き実施していくことが肝要と思われる。

●他地域への展開

北海道内で実施した今回の実例は試行的な取り組みであり、さらに他の地域に広げていくことが期待されているところである。今回は北海道博物館協会というフレームがあり、協会事務局はもちろん、各地区・部会担当者が強い熱意をもって尽力して実施することができた。他地域において同様の事業を展開するためには、他地域の県博物館協会や中心となる機関、スタッフ、財源など、その地域の状況を踏まえた展開の仕方を検討していかざるを得ない。この際、例えば学芸員課程を持つ大学等との連携など、博物館以外の主体も巻き込んでの展開ということも視野にいれて活動をしていくことが必要であると思われる。

平成30年度文部科学省委託事業
「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」

『「出会いと学び」を通じた学芸員資質向上と
博物館機能強化モデルの展開』事業報告書

※本冊子は、「令和元年度文化庁委託事業『博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承･発信事業』における『地域博物館同士のネットワーク構築に関する成果発信事業』」の一環として改編、増刷を行ったものです。

平成 31 年 3 月　印刷
平成 31 年 3 月　発行
令和 元 年12月　増刷
編集・発行：独立行政法人国立科学博物館
印 刷 製 本：株式会社セイコー社

国立科学博物館
National Museum of Nature and Science

HMA
北海道博物館協会
Hokkaido Museum Association

北海道博物館
HOKKAIDO MUSEUM